



三日前に大工が来て付けていった真新しい扉を三度、そして短い間を置いて二度、叩く音がした。エイマン王の宮殿でも十分通用しそうな上品な叩き方だった。

五日前の夜中に元の扉をばかどかい戦斧で粉々にした奴ではないことは確かだろうだった。ハーナンの四本腕の戦士は私の心臓か脳味噌が欲しかったらしいが、土産を手にする代わりに余分な腕を置き土産にしていた。

私は机の上に放りだしていた両足をくたびれた茶色い沓に突っ込み、「どうぞ」と言った。

扉は新品のくせに情けない鳴き声をあげてゆっくり開いた。サンジェリーの午後の喧騒を覆い隠すように、湿った冷たい風が吹き込んできて頬にまとわりついた。霧の季節ではないが、幽かな白い靄のようなものもいっしょに舞い込んできたようにも見えた。

入ってきたのは幸いにも人間で、美しい女だった。半袖の短い上衣は鈍い光を放つ黒紫色、胸元に深い切れ込みが入って、乳色のふくらみがのぞいていた。上衣と揃いの体に張り付くような腰衣も裾に切れ込みが入って白い足が見え隠れしている。踵の高い艶のある靴も深い紫、耳朶には細い金色の飾りが揺れ、首飾りも細い金鎖、蛇が絡み合ったような意匠の腕輪は金と銀、身なりからすれば金には不自由していないようだ。

アニヤチ人の血が入っているようにも見える顔立ちで、肌は滑らかな象牙色、項がのぞく短い黒髪を後ろになでつけている。唇には暗い紅、切れ長の目のまわりの紫と薄茶の影は化粧なのか深い隈なのか。年は三十絡みだろうか。

「エーヴン、スナブ・ランケン探偵局はこちらかしら」

肉厚の艶めかしい唇がそう動いて、低い響きのある声を発した。エーヴンという古めかしい挨拶の言葉を久しぶりに聞いた。血筋の古さしか誇れるものがない貴族ぐらいいいか、今では使う者はいないだろう。

「私がスナブ・ランケンです。エーヴン……」

「モエヤです。イム・モエヤ」

「ワシエ・モエヤ、お掛けください。お話をうかがいましょう」

私は同じくらい古い女性への敬称を付けて答えてみたが、術学が過ぎたかもしれない。モエヤ婦人は隅が破れた赤い革張りの客用の椅子へ身を沈めた。腰衣の切れ込みから、肉づきの良い白い太股がのぞいた。血色が良いとは言いかねる、わずかにくすんだような肌の色がかえって艶めかしかった。

「へハルロツツの瞳」をご存知？」

「いや、初めて聞く言葉ですね」

私は青硝子の細長い酒杯を二つとシエアを用意して依頼人の前の傷のある卓子に置き、酒を注いだ。

「宝石よ。そう、この杯の口くらいの大きさかしら。卵型で色は深い紫。薄暗いところでは真っ黒に見えるかもしれないわ」

婦人は酒杯を手にとると、透き通った琥珀色の酒を一口飲んだ。彼女の瞳はその酒と同じ色をしていた。

私は自分のシエアを半分ほど胃に吸い込ませた。

「盗難ですか」

「まあ、そうね。取り戻してくれたなら、三千ダズンお払いするわ。どう？ 引き受けてくださるかしら」

半眼に開いた色の薄い瞳がこちらを向いたように見えたが、奇妙なことにその視線を捉えることはできなかった。

三千ダズンは新しい扉どころか探偵局を丸ごと建て直せるような金額だった。真つ当な依頼と考えるには桁が多すぎる。

「宝石のある場所はわかっていきます。ただ、私ではそれを取り返すことはできない。あなたなら、きつとへハルロツツの瞳」を手に戻ってくることはできるわ」

「どこなのですか、その宝石のある場所というの？」

婦人は抑揚のない低い声で言った。

「トリプロ街にジクロイス教徒の神殿があることをご存知かしら。その神殿のジクロイスの聖像の中に隠されているわ」

私は残り半分のシエアを飲み干した。清貧を旨とするジクロイス教徒が宝石泥棒をするというのは、あまり聞かない話だ。

「あなたのお宅に彼らが押し入って盗んでいったのですか」
婦人は少しだけ首を傾げてから、うなずいた。そういう仕草をすると、

二十歳かそこいらの若い娘のようにも見えた。

「愚かな信徒が献金代わりにしようとしたのではないかしら。とても珍しい石で、神秘的に見えるのよ。高額の高捨をするとなつ国の扉が大きく開くのもかもしれないわ」

「ふむ、そうかもしれませんが。盗まれたのはいつのことですか？ 盗人の姿を見た者はいませんか？ 他に盗まれた物は？」

彼女は盗まれたのは一昨日の夜、賊の姿は見えていない、他には何も盗まれていないと答えた。

「盗んだのがジクロイス教徒だという証しはないのですね」

「神殿に宝石があることが証しね」

「まともな答える気はないのかもしれないが、私は問いを重ねた。どうしてジクロイスの神殿の、それも聖像の中に隠されていることがわかったのですか」

「噂よ。ジクロイスの神殿に大層な宝石を喜捨した者がいる。祭司たちは金に替える算段がつくまで聖像の中にそれを隠した、そういう話よ」

「あくまで噂なのですわ」

「確かな噂よ」

モエヤ婦人は唇の端にしわを寄せて、笑いを浮かべた。自嘲なのかふざけているのか、よくわからない。

「どうして警邏隊に届けないのですか」

「警邏隊は噂じゃ動かないわ」

婦人の話には確からしきはどこにもなかった。きちんと話すつもりがないのなら帰ってくれと言うこともできるはずだった。だが、琥珀色の瞳に見つめられると——視線の読めない目に見つめられるというのはおかしな話だが——話を切りあげることができなかった。

「急いでいるのよ。明後日の日暮れまでには必ず取り戻して欲しいの」

「それは随分と急な話だ」

「明後日の夜に大事な取引があるのよ。遠い所から取引先が来るの。どうしても明後日の日暮れまでにお願いたいの」

無理を言うなど追い返すのが正しい判断に違いなかった。だが、私はそうはしなかったらしい。

婦人は言葉ほどうれしそうでもなかったが、幽かな笑みを浮かべたままそう言った。琥珀色の瞳は私を見ているはずだったが、どうしても視線を捉えることができない。いつ私は彼女の依頼を引き受けたのだろうか。そんなことを言った覚えはないと言う前に、婦人は次の台詞を口にした。「取り戻してくれたなら、屋敷まで持って来てくださる？　そこで残りの御礼もお渡しするわ」

モエヤ婦人は手付けだと言つて革袋を卓子に置いた。手に取るとそれだけで決まりの額の何倍もあることはすぐにわかった。アイトーネ街の住所を告げて、婦人はすつと立ち上がった。

「ちょっと待ってくれ」

私も立ち上がり、そう口にしかけた。彼女の残り香なのか、ほのかな甘い香りが私の鼻をくすぐった。どこかでかいだことのある香りのような気がしたが、頭の中に霧がかかったようで、思い出すことはできなかった。

言いかけた言葉はどこかへ消え去り、奇妙な気息さを感じて私は椅子に体を沈めた。不快な気分というものでもなく、甘やかな夢に浸っているようにも感じられた。

扉の軋む音がやけに遠くから聞こえた。

二

次第に頭ははつきりしてきたが、自分がいつモエヤ婦人に依頼を引き受けたと言ったのか、どうしても思い出すことはできなかった。だが、断つたという記憶もなく、卓子の上にはダズン金貨の入った革袋があった。

私は三千ダズンと婦人の色香に迷って、知らぬ内に彼女の言葉にうなずいたのだろうか。

ファバーン剣を抜いて金貨の袋を突いてみたが、刀身に刻まれた神秘文字は沈んだままだった。古の「英雄」から譲り受けた古い魔剣は、怪魔の気を感じ取る力をまだ保っていたが、常に信頼できるというわけでもなかった。

向かいの安料理屋で遅い昼食をすませて、トリプロ街へ足を向けた。探

偵局のあるクーリカフ街からは、辻馬車を拾うまでもない距離だった。

トリプロ街へ近づくとつれ次第に路は細くなった。みずぼらしい有り様の家々が傾いで頭上に覆いかぶさるように見える。湿った石畳の路上で襤褸をまとった男が空を見上げて座り込んでいた。空の色だけは他の街と変わりはない。痩せこけた虎縞の猫が一匹、鼠でも追うかのように私の前を横切つて走り去った。

灰色の石造りの家の影から二人の男が現われた。二人は猫とは違って私の前に立ちふさがった。鼠を見つけたと思ったのだろうか。

一人は背の高いがっしりした体付きの男で、元は水色だったらしい穴だらけの上衣と、元の色がよくわからない裾のすり切れた洋袴を身に着けていた。もう一人は並の体付きで、相棒よりは少しはましな服を着ていたが、薄汚れた顔に浮かぶ粗野な気配は同じだった。二人とも腰に長剣を吊っていた。

「どちらへお出かけだい、兄さんよう」

背の高い方の男が黄色い歯を見せて言った。

「懺悔に行くんだ。お前さんの兄弟みたいな奴らを叩きのめすのには、いい加減飽き飽きしてきたんでね」

背の高い男は汚ない歯をさらにむき出しにしてにやにやと笑い、左手で長剣の鯉口を切った。もう一人は仏頂面のまま同じ事をした。

「懺悔なら俺が聞いてやるぜ」

長身の男はそう言つて剣を抜いた。身なりとは違ってよく研がれているらしい刀身が、午後の陽にざらりと光つて私の目の前に突き出された。

飛び退つて、外套の隠しから両手を引っ張りだす。私の右手は投剣を握っていた。後ろに回り込もうとしている中背の男にそいつを放り投げた。

剣は太股に突き刺さり、一声叫ぶと奴は石畳に倒れた。

長身の男の剣が再び襲ってきた。危うくかわし、私も剣を抜いた。ファバーン文字が刻まれた刀身は鉛色のままだった。少なくともこいつらは只の人間らしい。

背の高い男は勢いに任せて刃を振り回すだけで、剣技と呼べるようなものは持っていなかった。私はファバーン剣で男の胸を貫いた。奴は死んだ。

路上で投剣の刺さった足を押さえてうめいている男に、私は剣先を突き

付けた。

「話してもらおうか。物取りじゃあるまい、誰の差し金なんだ」

男は血の滴る切っ先を見つめて顔を引きつらせた。杵の先で足を蹴ると、男はぎゃつとやって汗を噴き出した。

「言えー」

だが、奴は何も言うことはできなくなった。首筋に一本の矢が突き刺さったからだだった。

間髪を置かず二の矢、三の矢が飛んできた。私は剣で矢を薙ぎ払い、近くの路地へ駆け込んだ。外套の裾が、ばたばたと鳴る。

矢の飛んできた方に目をやると、輪郭の歪んだ建物の窓奥に動くものが見えた。次の矢は飛んでこない。身を屈めて走り、何かが見えた家の扉に張り付いた。隙間のできた両開きの扉は簡単に開いた。薄暗い建物の中には動くものの気配はないようだった。

私は剣を握り直して建物に足を踏み入れた。部屋の中には色の失せた家具が幾つかあるきりだった。

矢を射かけたと思しき窓辺近くでは、やけに細い足跡らしきものが厚く積もった埃を乱していた。建て付けの悪い窓を無理に押し上げたらしく、朽ちかけた窓枠が折れて木屑が散らばっていた。

足跡は窓とは反対側の壁にある扉から続いていた。そこから出てきて窓辺に寄り、また戻って行ったように見えた。

扉は半ば開いていた。その奥の部屋も死のような沈黙が支配していた。寝室らしく灰色の布が掛けられた寝台が一つ、入って左側の壁際に置かれていた。足跡はその寝台へと続いていた。布の下には人が横たわっているかのような脹らみがあった。ファバーン剣の刀身には古代の神秘文字がわずかに緑色に浮かび上がっていた。私は剣先で布を取り払った。

矢を放ったものはそこに横たわっていた。茶褐色の皮が直接骨に張り付いているような指に、しっかりと半弓が握られていた。彼は素晴らしい射手だった。落ち窪んだ眼窩には、目玉の代わりに埃と一匹の斑の蜘蛛の死骸がつまっていた。頭にはまだ何本か頭髮が残っている。肋がむき出しになった左の胸には、錆びた短剣が突き立てられていた。

家の中をしばらく探ったが何も出てこなかった。荒らされた様子もあつたが、それも随分と前のことのように見えた。

ジクロイスの神殿にたどり着いた時には、家々の合間から差す夕陽が路上に縞模様を作っていた。神殿のまわりは信徒の手で掃除が行き届いているのか、路端に鼠の骸が転がっていたりすることはなかった。

薄緑に塗られた神殿は、両隣の朽ちて歪んだ家に比べれば立派に見えた。古い建物をあれこれ改築したものらしい。正面の幅は二十メートル（約六メートル）ほどだが、屋根には取ってつけたような尖塔がそびえ、青から桃色、黄、橙色に染まった空に黒い影を作っていた。

大小幾つもの迫持を寄せ集めたような造りで、柱や壁は幾つもの彫り物で飾られていた。聖典から取ったものなのだろう、聖人ジクロイスの行なったという奇跡とやらが浅浮き彫りや彫像になっていた。

二人の与太者と木乃伊の射手の相手をしている間に私は機を失したようだった。礼拝の終わりを告げるらしい鐘が鳴った。私は数軒離れた刀剣商の店先をぶらついて、神殿から出てくる人々に目をやった。

迫持型の扉が開いて、信者たちが出てきては散っていった。この街に相応しく美しいとは言い難い身なりの者が多かったが、中にはアイトーネ街に大理石と白亜の館を構えていそうな者も交じっていた。この無法の街に神殿を保っていられるのも、そういう信者を抱え込んでいるからだろうか。

愛と平和、禁欲と節制を説くジクロイス教はサンジェリイでは新興の少数派だった。人の数ほど神がいるこの大都会でも、彼らは異質の存在と言つて良かった。それは単に信徒の数や教義のせいではない。自分たちの神と聖人ジクロイスを唯一絶対のものとして、他の神々、他の信仰を否定し、邪教として排斥しようとするからだだった。近隣の寺院と面倒を起こすこともあり、この街に神殿を構えているのもそういった事情からかもしれない。

三十人ほどの信者の最後の一人が出ていくと、白い飾り気のない長衣をまとった白鬚の老人が扉を閉ざした。どうやら今日は店仕舞のようだった。

聖像にお目にかかって懺悔するのは後にして、私は足をワコフの店に向けた。

ワコフの店はトリプロ街の外れにあった。私は黄昏時の青い薄闇に覆われていく石畳の路を歩いた。

先刻、与太者を斬った場所を別の路地からうかがってみたが、すでに死体は二つとも消えていた。警邏隊を呼ぶような者がこのトリプロ街にいるとも思えない。死んだ奴らの仲間が片づけたのかもしれないが、別のおぞましいことも考えられた。この街には死体を売る商人もいるのだ。屍食鬼が金を持っているわけではないので、お得意様は死霊使いに屍姦が趣味の腐れ貴族といった連中だろう。私は足早にそこを歩き去った。

ワコフの店は石造りの小さな平たい家だった。一度も拭いたことがないような薄汚れた硝子入りの陳列窓には、この店ができたときからずっと手を触れずに置いてあるかのような古くさい意匠の安っぽい指輪や首飾り、腕輪などが並べられていた。安物とは言え、硝子窓を割って盗む者がいないというのは解せないが、何かの呪文で守られているのかもしれない。

私は塗りの剥げた軋む扉を押して中に入った。ちらちらする暗い角灯に照らされた店の中には、窓と比べれば少しはきれいな硝子の陳列台が三つ置かれていた。中の宝飾品はどれも奇怪な意匠で、誰が身に着けるのか想像し難い代物ばかりだった。一つだけ使い道がわかるのは髑髏に金銀や寶石をちりばめた仮面で、往時のナクシャッツの呪術師が生け贄の儀式で被った物だった。

店の奥に赤黒い色の古びた机があり、背の低い縮れ毛の男がその上に覆いかぶさるように背を丸めて、何かを布きで磨いていた。

男は顔を上げた。眠そうな眼をした中年の男だ。

「エーヴン、ワコフ。石は元気かい？」

「エーヴン？ スナブ・ランケン、久しく会わないうちに百も歳を取ったか」

男はしわがれ声で言った。手は休まず動かし続けていた。青灰色の布の間から暗緑色の子ども握り拳大の鈍く光る石が見えた。ワコフと前

に会ったのは一年ほど前のことだった。宝石の抜け荷が絡んだ一件でこの闇の宝石商人の手を借りたのだ。そのときもワコフは店の奥まったところで同じ石を磨いていた。

「ハルロツツの瞳」を知っているかい」

ワコフは石を磨く手を一瞬休め、太い眉をわずかに上げて私の顔を見

た。

「おめえさん、またろくでもないことにかかわってるな」
「ろくでもないかどうかは自分で決めるんだよ。金払いのいい依頼人が持ち込む仕事は多分まともな仕事さ。そうとでも考えなければ、この世にはろくでもないことしかなくなってしまうそうなんだね」

「口の減らねえ奴だな。よくそれで客が来るもんだ。ま、俺の店よりはましというものか」

ワコフはわずかに鼻を鳴らして笑った。曰く因縁のある宝石や飾り物を扱うこの店には、自らを飾り立てたいだけの客は訪れないだろう。

「ハルロツツの瞳」だよ、ワコフ」

「おめえ、あの石がどんなもんだか、幾らかでも知っているのか」

「お宅の磨いているその石より少し小さめで暗い紫色をしている宝石、それ以上のことは知らない。だから、ここに来たのさ」

ワコフは顔をしかめて言った。

「いいか、あんなもんを欲しがるのは質の悪い魔道士か怪しげな教えをばらまく神官ぐらいたという話だ。おめえはそのどちらでもねえし、そんなもんを欲しがる客が来たら、その剣で追い返してやればいいんだ」

「もう引き受けてしまったのさ。大事な客を裏切るわけにはいかない。剣を振るうには向かない手合に見えたしな。ハルロツツの瞳」のことを話してくれないか」

ワコフは眉を上下させ、半ばあきらめ顔で溜め息をついた。

「俺もそうよくは知らねえ。こういう商売をしているが、お目にかかったことはねえ。とにかく、えらく昔からあるもんだ。元々は西の海の彼方、パウグの国の大祭司が持ってたそうだが、今じゃパウグの国などどこにあつたのかさえ誰も知らん。メルカーに渡ってきたのもいつのことかわからんが、百年ほど前には、ベルコブのソモン・ネルホという魔道士が持っていたと聞いている。ソモン・ネルホがそいつで何をやらかそうとし

たのかは知らんが、奴は大きな術にしくじって、ベルコブの街もろとも消えちまったという話だ」

「街が丸ごと消えてなくなったのか」

ワコフはそうだと云った。様々な魔術妖術を目にしてはきたが、街が消えるのを見たことはなかった。

「消えた跡にはでかい穴が残って、それがベルコーの湖になったという言い伝えもある。魔道士と街は消えても石は残った。幾人かの魔術妖術を使う奴らが、その宝石の力を使って良からぬ術を試みたが、いつも恐ろしい厄災を招いて失敗に終わっているらしい。その話を聞きつけた山の民の呪術師が、これは呪いの石だと言って、どこかの山奥の祠に封印した、そういう話だ」

闇の宝石商は手の中の緑色の石に視線を移し、光の当たり具合を確かめるように回したり傾けたりした。そうすることで〈ハルロツツの瞳〉にまつわる忌まわしさを遠ざけているようにも思えた。

「ふむ、その石の御霊験とやらは何なんだ」

「そんなこと知らねえさ。とにかく魔道士どもにはえらく魅力的に見える代物なんだろうぜ。奴らが欲しがるもんにもんはねえ。おめえだってわかってるだろう。何でもいいから言い訳をでっち上げて、そんな話からは手を引くんだな」

「うむ、だが引き受けてしまったのさ」

同じことを二度言う自分がひどく愚かしく感じられた。

「大方また危ねえ女に引っ掛かってるんじゃないのかい」

ワコフは上目遣いにこちらを見て、皮肉な笑みを浮かべた。

「そうかもしれないな」

私は肩をすくめた。モエヤ婦人の琥珀色の瞳が頭の中から私を見ているような気がした。

「その石がどうして今はジクロイアの神殿にあるんだ」

ワコフは顔をしかめて、じろりと私をにらんだ。

「よく知ってるじゃねえか。あの糞坊主どもと悶着を起こす気か」

「まあ、場合によっては、というところだね」

宝石商は不機嫌な面持ちで話を続けた。

「ロラストの麓あたりを布教だか修業だかでうろついていた奴らが、たま

さかその祠を見つけた。呪術師が死んでだいぶ経って荒れていたらしいが、よその神やら何やらを貶めるのが奴らの常だ。祠を壊して石を手にした。だが、村人に見つかって追い立てられ、這う這うの体で逃げ出した。それで今はこの街の神殿に隠し持っているらしい、そういう噂だ」

依頼人が噂だと言った話とは随分と違うが、こちらの噂の方がもっともらしいのは間違いないかった。

「奴らはその石で何をしようとしているんだ」

「知るわけねえだろう。奴らにとっちゃ自分たちの神だか聖人だか以外は、みんな邪悪なものなんだ。得体の知れねえ魔力を持つ石なんぞ、この世にあること自体が許せねえんじゃないのか」

私はワコフの前に礼だといって、婦人からもらった手付けの金貨を一枚置いた。宝石商はそのダズン金貨を手に取り、矯めつ眇めつ眺めていたが、突然投げ捨てるように手放した。

「おい、これをどこで手に入れた」

私は覚えていないと答えた。

「偽金か何かかい」

「そうじゃねえ。見ろ、この刻印を。これはシルコフィー金貨だ。節制と禁欲のやたら厳しい戒律を課した教団が使ったものだ」

私は床に落ちた金貨を拾い上げた。よく見ると金貨には円環に幾つもの刺が生えたような小さな印が捺されていた。

「聖別されたものだから、これを使う分には儉約の教えを破ることはないんだ」

「金貨は金貨だろう。莫迦げた話だ」

「おめえ、シルコフィー教団の話を知らねえんだな」

私は知らないと言った。

「ああ、おめえがどこか外つ国をうろつき回っていた頃の話だからな。シルコフィー教団の祭司どもは、信徒には厳しく節制を強いる裏で献金やら何やらで金を巻き上げて贅沢三昧、それどころか、神との交合と称して年端もいかなない男女と乱行に耽った。見目良い信徒の子どもや時には祭司自らの子どもも供物にしたっていう話だ」

「ふむ、ひどい話だな。間々ある話でもあるが」

ワコフは眉間にしわを寄せてうなずいた。

「だが、あるとき、やつらの聖堂は火事で焼けた。ご乱行の最中だったらしく、妙な具合につながったまま黒焦げになった死体もあったらしい。祭司どもの悪行を知った信徒が火を付けたというのがもっぱらの噂だったが、焼ける前に奴らは皆殺されていたという話もあった。教団はそれでお仕舞いになったが、行方のわからないままの子どももいたらしい」

「巻き上げた金貨はどうなったんだ」

「消えた。警邏隊が調べに入ったが、聖堂の地下の金蔵は空だった。帳簿の類いも焼けたので、どれくらいあったのかもわからない。全部に刻印が捺されていたかもわからない。祭司どもは一人残らず死んだから。それから、時々、シルコフィー金貨が出回ることがある。出所はわからない。かわつた者はろくな死に方はしないらしい」

「やれやれ、呪いの金貨というわけか」

ワコフは両手で緑の石を握って、胸の前で小刻みに振った。魔除けの呪文が何かだろうか。

「いいから、それをさっさとしまえ。それをくれた奴が依頼人なら、それはまともな客じゃねえ。手を引け」

私はワコフに、いづれまともな金貨を用意すると言った。

ワコフの店を出るとすでに陽は落ち、街路のどこどころに、デリン灯がぼんやりとした光を放っていた。キノイームの独眼船長レッザが三百年前にデリン島から持ち帰った灯は、年月に磨り減りもせずサンジェリイの夜を照らしている。いつの日か、この街が墮落と退廃の炎のうちに滅んでも、その冷たい光は石畳を照らし続けるのだろうか。

私はジクロイスの神殿に向かい、歩きだした。

四

神殿には灯が点っていた。玄関脇の小窓は罫戸が閉まっていたが、橙色の灯が少しだけ漏れている。建物左右の路地をのぞくと、左側の路地に光が見えた。狭い路地を入ると、そこだけ罫戸が壊れているのか、奥の窓から燭光が差していた。

縦に長い窓には汚れた硝子が嵌まっていたが、建て付けが悪いのか隙間

があり、人の声が聞こえた。

中をうかがうと、そこは長椅子が並んだ礼拝堂のようだった。私の真正面、反対側の壁際には、膝の高さほどの台の上に長衣をまとった痩せた男の立像があった。聖人ジクロイスの像というのはこれだろうか。

左手、堂の正面には祭司がありがたい説教をたれる講壇があり、その後ろの壁には彫像と同じ人物を描いたらしい大きな絵が金色のいささか安っぽい額に収まっていた。薄い眉の下の悲しげな目が壇のまわりに集まった者たちを見下ろしている。

講壇のまわりには五人、小太りの男、灰色の口髭を蓄えた男、夕刻見かけた老人、まだ若い目の大きな娘、こちらに背を向けているもう一人も女だろうか。皆、白い法衣をまとい、壇上の燭台の灯の輪の中で押し殺したような声で話をしていた。

「本当にあの石にそんな力があるのか」

小太りの男が言うのと、背を向けた女が固い声で答える。

「碑文にはそう書かれていた。何人もこの石を使うことなかれ、悪しきものを招くことなかれ、身を滅ぼし世を滅ぼすことなかれ。そう読めた」

灰色髭の男が低い声で別の見方を口にした。

「それは邪な心を宿した者が用いた場合のことではないのか。純粹なる信仰を持った者が正しきことのために使えば、神の御業を世に示すことにはならないのか」

若い娘が大きな目を見開き、上ずった声を出した。

「ジクロイス様がお姿を現すのですか？ 私たちの手を取ってお導きくださるのですか？」

「フェロシイ、気持ち静めなさい。聖なる顕現はそう容易く起こるものではないません」

背を向けている女がたしなめるように言った。フェロシイと呼ばれた娘は、不満とも不安ともつかない面持ちで目をきよろきよろと動かした。

「きつと参られます、きつと。星の中からやって来られるのよ」

フェロシイは声を高め、講壇の前から離れて聖像の前にひざまずいた。早口に祈りの文句らしきものを口走り、聖像の足に接吻し、腰に腕を回して抱きついた。

「ああ、ジクロイス様、この不浄の世から我らをお救いください。私を、私

を天つ国にお連れください！ ああ、ああ」

若い娘の声は次第に乱れたものとなった。口髭の男がその肩に手を掛けると、フェロシイはびくりと体を動かし、うめき声をあげた。

「さあ、フェロシイ、落ち着いて、気を静めるんだ。必ずや救いは来る。天の国はお前のような信心の篤い者のためにあるんだ」

髭の男は娘の体を抱きすくめるようにして、そつと彫像から引き離れた。

小太りの男が小さな目をしばたかかせて、老人に向かって言った。

「あの石を何としますか。あの祠に捨て置いた方が良かったのでは」

「それでは、いつ邪教の徒により悪事に使われるかもしれない。正しき道を歩む者には悪業を防ぐ盾となる務めがあるろう」

幾らか年嵩らしい女がそう返し、小太りの男は口中でぶつぶつと不満らしき言葉をつぶやいた。

白い顎鬚の老人が口を開いた。

「フランジースコからの返書がまだ届かぬうちは、我らがここで守るしかあるまい。邪教徒は星辰の位置により様々な悪しき祭祀を行う。ここ数日を守り通すことが肝要だ」

口髭の男に肩を抱かれてフェロシイが講壇の前に戻ってきた。

「大事ないか、我が同胞の娘よ。お前には大切な役割がある。乱れた心には御言葉は聞こえぬぞ。心を安らかに保つのだ」

「はい、バンネール様」

娘は静かな声でそう言ったが、すぐに様子がおかしくなった。肩が震え、また目を見開いて視線を激しく動かす。

「どうした、フェロシイ」

バンネールの言葉に娘は頭を振った。

「誰かが見ている……誰かが……誰か、冷たい目の人が……ああ！」

フェロシイが叫ぶと同時に、ファバーン剣に掛けていた左手に奇妙な感覚が走った。

老人が目顔で指図し、他の三人がそれぞれ窓辺に向かう。私のものぞいてる窓には小太りの男が近づいてきた。

私は路地を抜け出し、トリプロ街を後にした。

五

新品の扉はまだちゃんとしていた。スナブ・ランケン探偵局と書かれた赤い文字も読むことができた。出てきたときと違っているのは鍵が開いていることだけだった。

家の中は灯がついていた。中にいるのはいきなり私の首を斬り落とそうという輩ではないようだ。

「エーヴン、お待たせしましたかな」

私は来客用の椅子にこちらに背を向けて座っている人間に声をかけた。

「勝手に入らせてもらいましたよ。スナブ・ランケンさん」

闖入者は悪びれた様子もなくそう言うと、立ち上がってこちらを向き、軽く頭を下げて挨拶をした。立つと結構背丈があった。

客は年老いた男だった。頭からすっぽりとかぶる卵色の長衣をまとい、

右手にはイユヒの木らしき物で作られた杖を持っていた。イユヒの杖はヒオゾタンの古い師が持つ物だという話は聞いたことがあった。老人の深いしわが刻まれた顔は柔和な微笑みを浮かべていて、人の家の鍵を外して中に入り込む類の人間には見えなかった。

「このような非礼をどうか許してください。なにぶん、極めて大切な用向きでしてな。急ぐことでもあるのです」

私は外套を奥の部屋に放り投げ、台所から杯を二つとシエアの瓶を持ってきて、老人の前の卓子に置いた。

「せっかくですが、酒はやらんですよ。シエアでは酒のうちに入らんと思われるかもしれませんが。これでもヒオゾタンの呪い師のはしくれですのぞな。おっと、名乗るのが遅くなりました。私はソモン・ビットと申します。ご覧の通りの貧乏占術師です」

ソモン・ビットと名乗る老人は、見た目よりも若々しい流れるような口調でそう言いながら、しわの中に半ば埋もれた青い瞳で私の顔を見つめた。魔道士の目を見て、その頭の中がわかるような人間は滅多にいない。私はその目の奥の色は読めなかったが、穏やかな面持ちの中に強い視線を感じた。昼間訪ねてきた視線の読めない女のことを思い返した。並の人間の目付きではないのはどちらも同じかもしれない。

「僕が飲みたいのさ。こんな時間なのにまだ一杯も飲んでいない」

私は腰を下ろし、自分の酒杯にシエアを注いで一口二口飲んだ。

「スナブ・ランケンさん、私がお邪魔したわけはおわかりですか」

老人は魔術にかかわる者とも思えない、軽い口調で話を切りだした。その手の人間が、皆、喉の奥に凶運を詰め込んだような話し方をするわけではない。

「いや、わからないね。占卜には詳しくない。おまけに謎々問答にも弱い」
「そうですね。まあ、よろしい。あなたは、ある宝石を取り戻してくれと頼まれていますね」

「仕事の話はできないね。依頼人の秘密を守くらしいの道理はわきまえてい

るんでね」

老人は私の台詞を半ば無視して言葉が続けた。
「その仕事はお断りになった方が良いでしょう。あなたにとって益になることは何もありません。それどころか、この世に計り知れない害毒をもたらすかもしれないです」

「それで与太者や木乃伊を使って邪魔立てをしたというわけかな」

老人は穏やかな表情を毛ほども変えなかった。

「ヒオゾタンには死人使いなどおりません」

「生きてるお宅がやって来たところを見るとそうらしい」

「我らとは別の邪悪な妖術の使い手があつた石を狙っているということですよ。あなたの命もまた狙われるかもしれない。手をお引きなされ」

「お宅に何かを命じられる覚えはない」

ソモン・ビットはわずかに顔を強ばらせた。

「あなたはあの石の恐ろしい力を知らないのです。あれを暗き魔道の者に渡せば、サンジェリイはおろかメルカーのすべての民に災いが降りかかるやもしれないのです。あなたの名前は厄災を招いた者として世の人々に永久に呪われることになりませぬ」

言葉に少しづつ力がこもり始めたように聞こえた。

「ソモン・ネルホというお宅によく似た名の魔道士が、その昔とある魔石を使った術をしくじり、街ごと消えてしまったという話を聞いた。街ごとということ、その街の住人も巻き添えを食ったということじゃないのかい」

ソモン・ビットは本意ではないかのように小さくうなずいた。笑みはもう消えていた。

「ソモン・ネルホ道士のその過ちを糧として、我らは爾来世の民人に害を為すような呪術を固く禁じてきたのです。我らにはあの石がこの街で使われることを阻む務めがあるのです」

私は中味が半分ほどになった杯を手に取り、少しだけ振ってみた。泡立つ金色の酒の中にモエヤ婦人の瞳が浮かんで消えるような気がした。

「その石を使うと何が起る？ サンジェリイが消えてなくなるとも言うのかい」

私はもう一つの杯にシエアを少し注いだ。老呪術師は手をつける素振りも見せなかった。

「あの石は門、あるいは鍵なのです。異界のものをこの世界に呼び込む恐るべき力を秘めています。ソモン・ネルホ道士は秘術を究めた者であつたと伝わりますが、それでも呪文のどこかに瑕疵があつたのか、あるいは異界のものの力を御することができなかったのか、街ごとあちらの世界に引き込まれてしまったと我らには伝わっています」

「それは百年前の話だろう。今、その石を欲しがっている奴らは何がしたいんだ」

ソモン・ビットはしわのよつた薄い唇を結んで、わずかの間沈黙した。

「それは確とはわかりませぬ」

「お宅のご先祖だか開祖だかは何をしようとしたんだ」

老呪術師はまた少しの間、黙っていた。

「確かなことは伝わってはおりませぬ。より大きな力、より深遠な世界の理を求めて、異界のものをつながりを持つとうとしたのではないか、とされております」

「それで、今、それを欲しがっている奴らも同じことをすると」

老人は曖昧にうなずいた。

「確とはわかりませぬが、恐らくは。我らの仲間幾人もの占兆に、凶事間近に迫れりと示されておりませぬ。明後日の深夜はイヴァーナ座の懐に赤き凶星へザイアが抱かれし時、世界を隔てる境目に緩み歪みが生じ、尋常ならざる力が流れ込み、また流れ出るとされる時、恐ろしい災禍が起らぬよう、石を求める者たちに渡してはならぬのです」

私は自分の酒杯を干し、瓶の残りを注ごうとしたが、ほとんど残ってはいなかった。

「それで僕にどうしろと言うんだ。僕が手を引いても、別の誰かが石を奪おうとするんじゃないのか。それとも、今ある場所にずっと留めておけばいいのか。いや、詰まる所、お宅らもその石を手に入れたんじゃないのか」

ソモン・ビットはもう一度穏やかな笑みを作り直した。

「さよう、石を我らヒオゾタンに渡してください。我らにはあの石が再び凶事を引き起こさぬようにする務めがあります。手に入れてくだされば、我らの秘術を駆使して誰の手にも渡らぬようにするつもりです」

「どうして自分たちでやらないんだ。お宅らも占いばかりやっているわけじゃないだろう」

老占術師は首を左右に振った。

「申しましたように我らは人を傷つける類いの呪術を固く禁じておりません。あなたのお力をお借りするより術はないのです」

ヒオゾタンが誰かを呪殺したとかいう話は確かに聞いたことはなかった。占いとささやかな呪い——誰かを振り向かせるとか、失せ物を捜すとか——を生業としていたのではなかったか。

「汚れ仕事はやらないというわけかい」

ソモン・ビットは綻びのある布袋を肩に下げていたが、その中から小袋を取り出して中味を卓子に広げた。

「手始めにこれを。石を我らにお渡し下さった暁には三千ダズンお支払いします」

卓子の上の金貨を手に取り、洋灯に近づけてみたが、妙な刻印はないようだった。

「あなたは古の魔力を秘めた剣を持っておられる。おそらくは邪悪なものを打ち払うべく鍛えられし破魔の剣、それを振るうあなたは異界の闇からこの世を守る者となる定めなのかもしれない。頼みましたぞ」

「勝手なことを言うな。そんな者になる気はない。剣は偶然手に入れただけだ」

「偶然を宿命と言い換えるのは容易いことです。運命に従い、あなたの務めを果たすのです」

呪い師は私の返事を聞かずに立ち上がり、イユヒの杖で二度、床を軽く突いた。老人の姿がこちらを向いたまま急に遠ざかった。扉が開き閉じる音がして、ソモン・ビットは姿を消した。高く細い獣の鳴き声のようなものが聞こえた。続いて蹄の音が遠ざかっていったが、それは馬の足音とは似て非なるもののように聞こえた。

私は客人が手をつけなかった泡立ちの消えた酒を飲み干した。卓子の上には空になった二つの洋杯とシェアの瓶、十枚ばかりのダズン金貨が残った。

机の引き出しから〈古鴉〉のディコンを取り出し、杯に注いだ。洋灯の光を受けたディコンは机の上に暗い琥珀色の影を落とした。モエヤ婦人の瞳も、夜にはこのくらいの仄暗い光を宿すのだろうか。

〈ハルロツツの瞳〉は尋常ではない力を秘めた魔石で、その力はこの世に災いをもたらすことがあるというのは、確かなことらしい。

だが、ソモン・ビットの言葉をどこまで信じていいのかはわからなかった。秘石を手に入れ、ご先祖らしき道士が為し得なかった術を成功させようとしてもおかしくはない。無論、占いや呪いを生業とする魔道士結社ヒオゾタンが、自分たち以外の信仰を排斥するジクロイス教徒と折り合いが良いとは思えない。

ジクロイス教徒はどうやらあの石を持って余し気味の様子だが、だからと言って手放す気があるとも思えない。あの若い娘はいささかいかれているようにも見えたが、私の気配を察知した。神懸かった力でも持っているのだろうか。冷たい目とはご挨拶だが。

私を斬ろうとした与太者と矢を放った死者をジクロイスやヒオゾタンが動かしていたとも思えない。彼らとは別に寶石にかかわろうとする者がいるのだろうか。

琥珀色の瞳の女は三千ダズンの報酬と得体の知れない力で私を幻惑し、仕事を引き受けさせた。青い目の老人も三千ダズンと口にして、強引に仕事を押しつけた。金貨の山と奇妙な眼差しがあれば、誰も彼も私を意のままに動かせると思っているのだろうか。

私はディコンをもう一杯引っかけ、壁に立て掛けたファバーン剣に目をやった。剣を私に託した古代の戦士もソモン・ビットと似たようなことを言ったが、そんなものに縛られる気はなかった。少しばかり妙な力はあつ

でも、剣は剣に過ぎない。人や人でないものを斬る道具だ。

六

新聞屋のヨーコックは丸眼鏡を指で押し上げ、探るような目で私を見た。眉毛の端が下がり、頬はこけ、肩が落ち、ひ弱そうにも見える男だ。だが、硝子玉の向こうの目は厳しく真実を見抜き、都合の悪いことを書かせまいとする輩にも屈することはなかった。通りに面した二階の部屋のすぐ下には「真実をあなたに」と大書きされた看板が掛かっていた。

「イム・モエヤ婦人？ 知らんな、そんな名前の女は。東部かどこかよそから来たんじゃないか。サンジェリイでは聞かない名前だ」

ヨーコックは壁のほとんどを占めている書棚から『サンジェリイ紳士録』を引き抜いて頁をめくった。

「載っていないな。出入りの多い街だからな、新興の商人とかには手が回らなくてもおかしくはないが。それで、その御婦人がどうかしたのか」

「ああ、ちょっと興味があつてね」

新聞屋は机の上に置いた『紳士録』の表紙を指先でこつこつと叩いた。

「こいつに名前が載っているからといって、紳士や淑女とは限らないがな、引っ掛かっているのか、引っ掛けられているのか知らないが、どうせ怪しい女だろう」

「ああ、そうかもしれない」

「いい加減にしないと身を滅ぼすことになるぞ」

「ご忠告痛み入るよ」

書棚に本を戻すヨーコックに私はもう一つの質問をした。

「シルコフィー金貨と教団については何か知らないか。僕がこの街を離れている間に一騒動あつたらしいんだが」

「こちらを振り向いたヨーコックは難しい顔をして、また眼鏡を押し上げた。

「呪いの金貨でも手に入れたのか」

「ちよっと知りたいだけさ」

私はワコフから聞いた話を新聞屋にして、もう少し詳しい話を知りたい

と言った。

「それで十分だと思うがね」

ヨーコックは書棚の奥の方へ行き、日に焼けて薄茶色になった切り抜き帳を引っ張り出した。新聞や書き付けが貼り付けられた帳面をめくり、憂鬱そうに話をした。

火事の後の顛末について少しばかり詳しい話を新聞屋は知っていた。

「残った信徒の中には教団を再興しようとした者たちもいたが、うまくはいかなかった。ジクロイスに宗旨替えした者もいたらしい——禁欲的という点では似ているからな——、何かを拜むのはもうこりこりという者もいた。だが、それだけじゃない。厳しい戒律を守っていた反動からか、祭司たちの乱行に感化されたのか、いわゆる淫祀邪教に走る者たちもいた。ヴァレム教やら法悦精血会やら、そういった手合にはシルコフィー教団から流れた者もいるらしい」

「ふむ、禁欲の次は乱倫か。忙しいことだな」

「何を信じようと信じまいと勝手だがな。新しく妙な教団を作った者たちもいた。祭司たちが儀式の贅としていた子どもたちの中に、一人、特別な力が宿っているという子どももいて、その子を生き神として崇める連中だ。その子ども目の目に見つめられれば大人も意のままになってしまったという話だ。信じ難いが、シルコフィー教団の壊滅はその子どもが仕組んだという噂もあつた」

「その教団はどうなったんだ」

「奴らが引き継いだのは徳操の教えではなく乱行の方らしいが、それだけじゃない。シルコフィー金貨も粗方彼らが手にしたという噂だ。それで警邏隊に目をつけられて、その生き神様とともにサンジェリイから姿を消した。サンジェリイを去った後どうなったのかはとんと聞かないがな」

「その子と教団の名前は？」

「子どもの名前はわからないが、十かそこいらの娘だったらしい。教団の名は金眸教だ。その特別な子ども目の目は金色の妖しい光を放つたという噂だった……モエヤ婦人とかいうのはその娘か」

私は首をひねってみせた。

「さあ、そうかもしれないがわからないね」

ヨーコックが開いてこちらに向けた切り抜き帳の頁には古びた木版の

ちらしが貼り付けてあった。薄物をまとい、切れ長の目を半眼に開いた子どものまわりを裸の男女が輪になって囲んでいる。男女の体は絡みあい、つながりあい、陶酔の面持ちだが、真ん中の子どもは大人びた醒めた顔つきをしている。子どもは男とも女ともつかず、頭の後ろには車輪の輻のよう^ハに後光らしきものが描かれていた。ちらしの天地左右は振じれた奇妙な書体の文字が囲んでいたが、読み取ることができなかった。

「似ているか」

「さてね」

ヨーコックは切り抜き帳を棚に戻した。

「お前が怪しい教えに惑わされるとは思わないが、妖しい女にはそうはいかない、そうだろう」

「否定はしないね」

「無事に夢魔の寢床から抜け出られるといいがな」

新聞屋は片頬だけを歪ませて笑みとも何ともつかない表情を作った。

「もう一つ忠告しておこう。シルコフィー金貨を持っていたとしても、使うな。教団に金を巻き上げられた者たちには今でも恨みに思っている者がいる。どこからか話がつながって、お前が教団とかかわりがあるとされれば、厄介なことになるかもしれない」

「だから呪いの金貨なのか」

「どういう仕事か知らないが、深入りする前に手を引くということは考えないのか」

私は肩をすくめた。

「皆、同じことを言うね」

「手を引く気はなさそうだな。話がうまく転がりそうだったら教えてくれ。盗られた金が幾許かでも戻ればいいからな」

私はそうすると答えた。

ヨーコックの店の階段を下りながら、おかしなことに気づいた。シルコフィー教団にせよ金眸教にせよ、どんな教義でどんな神を崇めているのか、厳しい戒律や乱行の先には何があるのか、ワコフもヨーコックも何も語らなかつた。語るべきものは何もない、言葉と行為はあっても内実はない、そういうものなのかもしれない。

早めに店を開けるクラシーヤ街の飲み屋を回り、幾らかモエヤ婦人の噂

話を探った。人目につく容貌であることは間違いないと思えたが、誰もそんな女は知らないと言った。存外、地味な暮らしをしているのかもしれない。

婦人に教えられたアイトーネ街の屋敷に足を向けた。緩い坂道を登ったところに婦人の屋敷はあった。白く塗られた高塀に囲まれていて、唐草模様の鉄の門扉は鍵が閉まっていた。表札らしきものはなかった。門扉越しに見える庭木はあまり手入れがされていないようで、アイトーネ街にしてはこぢんまりとした屋敷の白壁は半ば緑に覆い隠されていた。

本当に宝石がこの屋敷から盗まれたのなら、邸内で盗人の残した跡を探るのが定石だろうが、モエヤ婦人がそれを許すとは思えなかった。

あたりに人通りはなかった。近隣の家々も木立と塀に囲まれて静まり返っていた。日は暮れかかり、遠くにデリン灯の光がぼつんと見えたが、家々には灯はなかった。アイトーネ街に小振りだが瀟洒な家を建てて、そこに女や男を囲うのが流行ったという話を聞いたことがあったが、このあたりはそうした界限なのか、暮らしのにおいというものが感じられない家並みだった。

イム・モエヤという女は本当に存在しているのだろうか、突然そんな疑問が頭に浮かんだ。昼下がりの探偵局で私は幻の女を見たのではないか、そんなおかしな考えが脳裏に去来した。妙なうそ寒さを感じて、私は坂道を下った。

七

夜のトリプロ街も人気のないことに変わりはない。石畳には私の足音だけが響いた。月は出ていない。幽かな星明かりと間を置いて立っているデリン灯だけが私の行く手を照らしていた。

ジクロイス神殿まで後わずかのところで、夜のしじまを破る音が聞こえた。悲鳴は私の行く手から聞こえてきた。私は駆け出した。

神殿の横手あたりから物音が聞こえ、黒く蠢く影がころうじて見えた。建物の中からは苦しげなうめき声が、途切れ途切れに聞こえていた。

影は街路へと飛び出してきた。神殿の前には傾いだデリン灯が一本

立っている。その薄青い光を浴びて、そいつは姿を現した。上背のある男で、見覚えのある粗末な服の胸には大きな血の痕があった。私の剣がつけただものだ。そいつは死人だった。墓場の土の下で眠りを貪ることもできず、右手には長剣を下げ、左手には何かを握りしめ、私の前に立ちふさがった。

奴は白く濁った目玉でこちらを睨み、長剣を突き入れてきた。いかにも生気のない様だが、緩慢というわけではない。生前より剣さばきは素早いかもしれない。フアバン剣を抜くと、刀身の神秘文字がほのかな青緑色の光を発した。魔道の力が働いている証しだった。奴の姿を見れば一目瞭然のことではあったが。

二度三度、奴の剣を打ち払い、首筋に一撃を見舞った。奴はろくに守りも固めていなかった。死人に生への執着心はないのだろう。首が飛んで鈍い音を立てて路上に転がったが、奴の動きは止まらなかった。首のないまま私の胸を斬り裂かんと剣を振るった。虚を突かれ、奴の剣先が外套の端を裂いた。私は姿勢を崩した。

だが、次の一撃はなかった。奴は私に背を向けると走り出した。首もないというのに、やけに速い。見る見るうちに後ろ姿が小さくなっていく。「くそっ」

私は罵詈雑言を吐き、奴の後を追って駆け出した。奴は百イート(約三メートル)ばかり先をひよこひよここと妙に体を揺さぶって走っていく。滑稽と言うべきか不気味と言うべきか、よくわからない姿だ。

三つほど角を曲がり、私と死人はひどく寂れた通りに入った。ナクシャン通りだろうか、死体商人の秘密の店があると噂されているのはその通りだった。幾人かの死人使いも住んでいるという。

闇に閉ざされた路を私はほとんど足音を頼りに奴の後を追った。とても追いつけそうになかった。同じ間合いを保つのが精一杯というところだ。奴は疲れなどもう知ることのない体なのだ。

通りには何やら不快なおいが立ちこめていた。道の両側には家々の崩れかけ歪んだ影が朧に見える。すべてを闇に溶かす夜の方が、不安をかき立てる代物の見えてくる昼間よりも、ここではましなのかもしれない。

不意に奴の足音が消えた。前方に目を凝らしたが何も見えなかった。数十イート走って立ち止まった。自分の息の音がこの世のすべての音の

ようだった。首のない男の姿は見えない。だが、不可思議な小さな光が闇の中に浮かび上がった。

それはちょうど、腰のあたりの高さに薄紫の光を発して浮かんできた。卵形のそれ自体はほとんど黒に近い色で、光を発しているのはそのまわりの空気のようなだった。

虫の羽音のような音が響いた。宙に浮いたそれを中心に一人の人間の輪郭が赤紫の光で描き出された。やや背の低い横幅のある姿が次第に実体を伴い始め、光る石を掌に載せた男の姿となった。

「スナブ・ランケン、今宵こそ我が神の贄となつてもらおう」

目の細いその男は、低い、感情の欠けらもなさそうな声で言った。赤紫の光に包まれた男は黒っぽいひと続きの長衣をまとっていた。右袖に太古の文字らしきねじれた金糸の縫い取り模様があり、長衣の裾からは爪先が反り返った杓がのぞいていた。猪首に獣の牙を二本交差させたような飾り物を下げている。

見覚えのある出で立ちだった。セベ・チャグルの神官はこういうなりをしている。

「お宅のところの神様はどうの昔に塵になったんだろう。残ったのは悪食の習いだけだ。その石は食べられまいがな」

「我が神は滅んではおらぬ。しばしの眠りにつかれておられるのだ。星々の位置が時を示している。我が神はもうじきお目覚めになれる」

人喰い神の神官は抑揚のない声で言った。これならさっきの死人にしゃべらせてもたいした違いはなさそうだった。

「それには、その石どころが入り用というわけか」

セベ・チャグルの神は数十世紀の昔、オラベディア座の彼方のへ光る神々との戦いに敗れ、灰色の塵になったと伝えられていた。神は死んでも神官たちは死ななかつた。連綿とおぞましい習いを続け、口元から血を滴らせた四本腕の神を崇め、その復活を信じている。

私はしばらく前に奴らの神殿から食人の儀式の供物にされそうになっていた幾人かを救い出した。奴らは神の姿を模して妖術で造り上げた「ハーナン」の戦士を探偵局に差し向けたが、私は奴らの労作を返り討ちにした。

「あの化け物は使い物にならなくなったと見えるな。それで古いのや新しいのや、死骸を直に使うことにしたのか。お宅らの秘儀も随分安直なものになったものだ」

「言わせておけば！」

この男にもどうやら怒りの感情はあるらしかった。不意に闇の中から空気を裂く音がした。既の所で首なし男の刃をかわし、ファバーン剣を振り回した。手応えがあった。赤紫の光と神秘文字の緑色の光の中で、生ける死者の腹が裂けて臓物が飛び出すのが見えた。だが、奴ははみ出した自分ののはらわたのことなど気に留めはしなかった。

次の斬撃が振り降ろされる。私は奴の剣を持つ腕を肘のあたりで切断した。右腕が剣を握ったまま路上でのたうち、刃が石畳に当たって音をたてる。

それでも奴は残った腕を闇雲に振り回して迫ってくる。私は奴の足下を薙ぎ払った。腱を斬られた奴は立ち上がることはできなくなり、路上で手足をばたつかせた。

神官が次の一手を打つ前に、私は素早く剣を突き出した。切っ先が奴の体を包む赤紫の光に触れた瞬間、虫の羽音のような音が大きな唸り声のようになった。小さな電光が飛び散り、ファバーン文字が緑に燃え上がった。

神官の顔に驚きの表情が浮かんだ。それは一瞬にして苦痛と後悔と恨みの入り交じった凄まじい形相となった。私の剣は奴の背中に突き抜けていた。血塗れの剣を引き抜くと、それに合わせるかのように歪んだ口から呪文か祈りの一節かが吐き出された。

「サルブネク アトカ！ セベ・チャグル ラミ……」

神官は膝から崩れ落ちた。赤紫の光も羽音のような音も消えた。

からからと音を立てて寶石が石畳の上を転がり、何かに触れて止まった。寶石を拾い上げたとき、私の手に冷たいものが触れた。私の足下には首と右腕を失った男が二度目の永久の眠りに就いていた。

〈ハルロツツの瞳〉は私の手の中で、幽かな脈動を続けていた。淡い紫色の光に包まれたそれは、ちょうど掌に収まるほどの卵形で、蜥蜴か蛇にも似たぬめりとした冷たい肌触りは心地よいとは言えなかった。黒紫色の宝石の中では、青みや赤みを帯びた紫色の渦巻き模様にも見えるものが

ゆっくりと動いていた。

いかにも禍々しく見えるその石を懐に入れると、ファバーン剣の神秘文字が明滅し、柄を握った手に痺れるような感覚が伝わってきた。長く身に着けていた代物とは到底思えなかった。

八

ジクロイス神殿まで戻ると、昨夜と同じ左側の路地から灯が漏れていたが、心なしか光がはつきりしているような気がした。玄関の前には私が斬った死人の首が転がっていた。明朝には信徒が片づけるのだろうか。路地奥の光に近づくと、鏝戸のない窓が枠ごと叩き壊されているのがわかった。足下で硝子の欠けらが小さな音を立てた。フェロシイとかいう

あの娘は私、いや、ハルロツツの瞳の気配に気づくだろうか。壊れた窓からそつとのぞくと、反対側にあったジクロイスの彫像が床の上に倒れており、頭が二つに割られていた。

講壇後ろの聖人図は、虚ろな目付きで昨日と同じ五人の法衣姿の者たちを見つめていた。小太りの男の白衣は肩口が裂けて、赤い染みが滲んでいる。

「おお、何ということだ。あれはやはり災いを招く呪いの石だ！」

斬られた男が、うめくように言った。深手というわけではないようだ。

「盗人は尋常の者ではなかったのだな」

女が冷静な声で言った。年嵩の方だが、今夜もこちらに背を向けていた。

「そうだ。あれがジクロイスのお恵みを受けたまっとうな人間であるはずがない。おお、あの顔、あのおぞましき目よ！ あれは死人だ！ 忌まわしき暗黒の魔術にて、地獄から呼び寄せられた死人に違いない！」

興奮気味に小太りの男が言う。

「石は邪教の者の手に渡ったということか。あの石にまつわる話が真実であるなら、我らの聖道を妨げる大きな敵が現れることになるやもしれぬ」

女の声には暗い響きがあった。

「偽りの神々が甦るといいますか！ 恐ろしい！」

フェロシイという目の大きな娘が頬に青白い手を当てて大きな声を出した。灰色の口髭を蓄えた男が若い女の肩に手を掛けて言う。

「そのようなことが起こるはずはありません。ジクロイス様のお力が悪しきものを必ずや打ち払います」

それまで沈黙を守っていた老人が口を開いた。バンネールとかいう名前だったろうか。

「神は一つにしてすべてなるもの、我らが神以外には存在せぬ。邪宗の徒がどのような悪鬼を招き入れようとしているにせよ、ヘザイアの星がイヴァーナ座と交わる時まで、あの石を取り戻さねばならない」

一同はバンネール老人の言葉に深くうなずいた。背を向けた女が厳めしい調子で次の言葉を発した。

「フェロシイ、これより聖なる御言葉を頂きます。準備をなさい」

「はい、レリージ様」

若い女の声には幾許かの逡巡があるようにも聞こえた。

フェロシイは講壇の前に後ろを向いて立ち、そのまわりを残る四人が取り囲んだ。老人が祈祷書なのだろうか、分厚い書物を手にして、もごもごとはつきりしない言葉を口にした。時折、他の者たちが短い言葉を繰り返して唱和したが、何と言っているのか聞き取れない。

フェロシイは白い長衣をするりと脱ぎ捨てた。均整のとれた体つきだったが、いささか痩せ過ぎで、肋が浮いて見えた。彼女の白い背中から尻にかけては、何本もの細長い傷痕があった。鞭の痕のように見えた。

レリージという女が短い鞭を手にして、裸の娘の後ろに立った。鞭は何本かに分かれた縄でできており、幾つもの瘤がついていた。フェロシイは講壇に手をつき、足を幾らか開いて尻を突き出した。口髭の男が娘の股の下に銀の深皿を置いた。

「おお、聖なるジクロイスよ、我らに御言葉を与えたまえ。清浄なる娘の血と肉により、我らの歩むべき道を知らしめたまえ」

年嵩の女はそう言って、フェロシイの背に鞭を振り降ろした。若い娘は短いうめき声をあげたが、叫び出すこともなく、姿勢も崩さずに痛みに耐えた。レリージはさらに二度、鞭を振った。

鞭は小太りの男に手渡され、男は傷を負っていない左手で、同じように娘を三度鞭打った。フェロシイは身を震わせながら、声を殺して苦行に耐

え続けた。背中から尻に赤い傷が何本も交差した。

次に灰色の口髭の男が娘を鞭打った。髭の男の鞭は前の二人よりも力がこもっていたようで、白い背と尻の皮が裂け、赤い滴がしたたり落ちた。フェロシイは耐え切れなくなり、短い悲鳴を三度あげた。

最後の一打ちが入ると若い娘は背を丸めて尻をひくひくと蠢かした。股間から淫水なのか小水なのか、何かが滴り落ちて皿に溜まった。

鞭打ちが終わると老人は祈祷書を燭台に持ち替え、娘の背中の傷痕と流れる血を照らし、指でなぞるような仕草をした。口の中でまた聞き取れない言葉を発した。

「聖なる御言葉は与えられた。我らの歩むべき道、為すべき業は示された。天を衝く小暗き高殿で忌むべきものを呼ぶ声あり。その声を遮り、悪しき祭祀を阻むことこそ、我らの務めだ」

三人から感嘆の声が上がり、同時にフェロシイが倒れ込んだ。口髭の男が銀の深皿を素早く引き抜いた。

ジクロイス教徒が鞭と流血で神託を得るなどという話は聞いたことがなかった。外には漏らさぬ秘儀なのか、あるいはこの神殿がそういう宗派のものなのか。人を喰わないだけセベ・チャグルよりはましかもしれないが、他の神々にけちをつけられる義理があるとは思えなかった。

年嵩の女はフェロシイを抱きかかえ、奥の扉へと消えた。口髭の男は深皿の中のを首の細い小瓶へと移し替えて栓をし、老人へ渡した。バンネール老人は小瓶を手に呪文か祈りの文句かをつぶやいた。

三人の男はぼそぼそと何事か相談し始めたが、奥の部屋から途切れ途切りに聞こえてくる女の叫び声で遮られ、何を話しているのかはわからなかった。

奥の扉が音をたてて開き、半裸のフェロシイが飛び出してきた。レリージが肩をつかもうとするが、若い娘はそれを振り切り、大きく見開いた目で礼拝堂の中をぐるぐると見回すと、頓狂な声をあげた。

「見ているわ！ 邪悪な瞳が見ている！ 紫の目がきらきら、きらきら！ 光っている、妖しの星がぴかぴか、ぴかぴか！」

フェロシイは礼拝堂の中を歩き回ると、私のがぞいている壊れた窓へと近づいてきた。

「そこ、そこ、あそこできらきら、ぴかぴか！」

「盗人が潜んでいるというのか!」

信徒たちが窓辺に走り寄ってきた。私は急いで路地を出て、その場から走り去った。首を見つけたらしい叫び声とあたふたと駆け回っている足音が聞こえたが、夜の闇の中で私を捕らえることはできなかった。

九

神殿から離れて確かめると、懐中の〈ハルロツツの瞳〉は変わらず仄かな光を放ち、脈動を続けていた。怪しげな秘儀によるものなのか、あの娘に特別な力が備わっているのか、この石の放つ何かを感知したのでろう。フェロシイが何かを感じ取ったにせよ、ジクロイス教徒たちは私のことをまだ知らない。しかし、セベ・チャグルの者たちが、私に〈ハルロツツの瞳〉を奪われたことを知るのに、そう時はかからないだろう。

モエヤ婦人とシルコフィー教団とやらのかわりにははつきりとはわからなかったが、得体の知れない何かを異界から呼び出されるのを看過するわけにはいかなかった。呪いの金貨を返せば勘弁願えるだろうか。

いつの間にか、あたりには霧が渦巻いていた。トリプロ街を出てねぐらに向かっているはずだったが、たちこめる霧の中、鈍く光を放つデリン灯に照らされた街並みは、見覚えのあるクーリカフ街とは違っているようだった。霧は何本もの触腕がもつれ合うかのように、私のまわりを取り巻き、家々は奇妙に歪んで見えた。巨人の手でねじ曲げられたかのように、デリン灯の柱もぐにやぐにやと曲がって見える。

私は足を止め、あたりを見定めようとしたが、霧と歪んだ家々は一緒くたに絡み合っただけで蠢いているようだった。私は剣の鯉口を切った。

「今夜はたいして飲んだわけじゃない。これは素面で見える光景じゃない。そろそろ出てきてくれないか」

甘い香りとともに、霧の中に黒い人影が現れた。輪郭こそ霧に滲んでいるようだが、その姿は歪んではいない。

イム・モエヤ婦人は唇の端に幽かな笑みをたたえていた。半眼に開いた黄金の瞳は、私を見据えているようでもあり、西の大洋の彼方までも見通しているようでもあった。アニヤチの山寺で見た木彫りの秘神像を私は

思い出した。

「セベ・チャグルの愚か者どもが動き出すとは、私も少し甘かったようですね」

彼女の低い声は霧に染み通って、私の体の奥まで響いてくるようだった。

「しかし、あなたはうまく片づけてくれました。感謝いたしますわ」

「お屋敷でお待ちじゃなかったのか」

「あなたの身を案じたのです」

「そりゃあ、ご親切に。でも、案じたのは僕じゃなくて石の方だろう」

モエヤ婦人は嫣然とした笑いを浮かべ、こちらに一歩近づいた。

「この石を使って何をしようというんだね。大事な取り引きとかいうのは宝石商人相手ではないんだろう」

「ハルロツツの瞳〉について何かお調べになったようね」

「一日あれば、いろいろなことがわかるのさ」

婦人は長い睫毛を伏せ、わずかにうなずいた。

「ヒオゾタンの老人も余計な話をしたようですね。つまらない過去のしくじりにいつまでも拘泥する愚かな者たちだわ。あの老人もそろそろ杖を置く時でしょう」

「僕も剣を置く頃合いかね」

彼女は、なめらかな動きで顎をつんと上に向け、目を細めた。色の薄い瞳がほとんど透明に見えた。

「さあ、あなたは……」

婦人はもう一歩私に向かって近づいた。腰衣の切れ目から白い太股のぞいたかと思うと、女は私の眼前に立っていた。しなやかな両腕が私の肩に触れ、首に絡みついてくる。甘ったるい香りが私の鼻をくすぐる。ただの香水、ただの女のおいではなかった。気息が全身に広がっている。まだ左手は長剣の鏢にかかっていたが、この女を斬ることはできないと、誰かが私の頭の中でささやいていた。

至上の快楽の仮面はすぐ私の目の前にあった。なめらかな象牙色の肌、艶のある黒髪、半眼に閉じられた瞼の下からは視線の読めない潤んだ瞳のぞいていた。鼻孔がすすかに動くのがわかった。私にもたれかかった婦人の豊かな肉体は妙に冷たく感じられた。

沈んだ色合いの紅唇が開いて、ぬめりと光る桃色の舌先が見えた。甘い息、どこかでかいたことのある香り、甘美な、だが、かすかな腐臭が入り交じった香りが私を包み込む。

剣に置いていた左手に奇妙な痺れるような感覚が走り、不意に記憶が蘇った。私は彼女の腕を振り払って後退った。この香りはキュソアの人形店でかいだものと同じものだ。

人形師キュソアは見た者を狂気の淵へと突き落とす恐るべき美しさを持つ生きた人形を造っていた。キュソアはどんな匠の技をも超えた神技で凄艶の生き人形を造り出すためにヨーラという神の力を借りた。

三千年の昔、シエラドゥーアの都で崇められていたという邪美神ヨーラは、あらゆる道徳や倫理、禁忌を超越した至福と悦楽の世界を供し、シエラドゥーアは至高の美と性愛が横溢する楽園であったという。

モエヤ婦人から漂う甘い香りは、キュソアの店の奥まった一室、ヨーラの祭壇で焚かれていた香のにおいと紛れもなく同一のものだった。

私は人形もろともキュソアの店を焼き払い、人形師は自らが呼び出したヨーラの眷族に命を奪われた。だが、ヨーラを崇める者はここにもいたのだ。

「ヨーラの崇拜者の仕事を引き受けていたとは、甘いのは僕の方だったよ」

モエヤ婦人は驚きの色も見せず、静かに言った。

「ヨーラを御存知だったのね」

「まだ、このサンジェリイは滅ぼすには早すぎる」

「サンジェリイを滅ぼそうなんて考えていないわ。人の心に巣くひ縛りつける偽りの善、良識と常識、型に嵌まった偽りの美に惑わされず、真に美しいものを感じられるようにしたいというだけよ。ヨーラが魅れば人々はこの現し世に楽園を見いだすことができる」

「僕の知っている話ではヨーラはセベ・チャグル同様（光る神々）との戦いに敗れて、塵と化した。シエラドゥーアも灰となり、今では背徳と墮落の都として、一握りの人間だけが知る幻の都だ」

「そういうことになっているわね。でも、決してヨーラは滅びない。人の心が美と快楽を求め続ける限り、真の消滅などあり得ない。シエラドゥーアは人間が望んで滅ぼしたわけではない。神々の戦いの煽りで消え去っただけ。今でも、その残映はこの街に残っている。ヨーラとシエラドゥー

アの漂う幻夢がサンジェリイに数多の享楽と芸術の興隆をもたらしているのよ」

「この街の繁栄は、王侯将相を民議院が強く律し、西岸の街々との交易と約定の下に作り上げてきたものだ。戦の愚かしさを憎み、平和を強く望む人々の手で作ったものだ。神などというものの手になるものではない」

「思いの他、理想主義者なのね」

「理想？ 違う、現実だ」

「三千ダズンは欲しくはないの？ 現実の話よ」

「この街を売るには足りないね。それに呪いの金貨なんだろう、シルコフィーとやらの」

アニヤチの天女図のように臍長けた顔貌に幽かに強ばった何か浮かんだような気がした。

「金貨なんて多かれ少なかれみんな呪われているものよ。あら、呪われているのは使う方かしらね」

「過去に呪われ、囚われているのはあんたもヒオゾタンも同じじゃないか。金眸教はどうなったんだ」

「幻よ。すべて幻、教え」などすべて幻、肉の悦びだけが真、いいえ、それも一時の幻……」

婦人の顔に浮かびかけた何かは艶美な薄笑いの中にすぐに消えた。霧がにわかに深くなり、婦人の姿もその中に揺らめいて朧になる。ねじれ、歪んで見えていた周囲の家並みが急に高さを増し、幾つもの尖塔と円屋根が重なる壮麗な街並みになっていく。それは霧に霞む黒い影から、鮮やかに彩られた美麗な姿へと変貌し、無数の浮き彫りや彫刻、様々な紋様が街を覆い尽くしていく。

私が目にしてるのは広場なのだろうか、それとも大広間のような場所なのだろうか。樹木のように曲がった柱やねじれた梁の合間からは薄青い空がのぞいている。足下の格子模様は床なのか石畳なのか、その上に幾重にも絨毯や座布団が敷かれ、幾つもの長椅子や寝台が無造作に置かれている。

大勢の男女がその上で交合している。様々な姿態で体を重ね、交わり、歓喜の声をあげている。女同士、男同士でつながっている者たちもいる。三人、四人と絡まりあっている者たちもいる。老いた者も子どももいる。

嬌声、喘ぎ声、喜悅の叫びが弔している。肉と肉を打ちつけあう音がする。淫水が飛び散り、噴き出す音がする。楽士が見慣れない奇妙な楽器を持ち、聞きなれない音楽を奏でている。それは情交に耽る人々の動きに合わせるかのように聞こえ、また楽の音に合わせて人々が腰を振っているかのように見える。それどころか、立ち上がり踊りながら交わっている者たちもいる。

そこに置かれた皿や鉢には肉や魚、果物など食べ物が盛られ、酒らしき飲み物の入った杯や水差し、瓶、樽もあちこちに置かれている。人々は交わりながら皿や杯に手をのぼし、飲食にも耽る。裸の胸を血のように赤い葡萄酒が流れ落ち、肉汁が口から滴っても、気にする者はいない。

むせ返るような肉と肌、汗と淫汁のにおいととも、あの甘い香りが漂っている。吊るされたり置かれたりした香炉から、薄紫の煙が立ち昇っている。

時折、奇妙なものが動き回る。桃色がかった半ば透き通った肉とも泥ともつかない不定形のもものが、這い回っている。それは触腕のようなものをのぼすと空になった鉢や水差しを中味の入ったものと取り換えている。誰かが漏らした小便の上に不定形の身を被せると、その跡はきれいになくなっていく。人々の饗宴はこの奇怪な召使いが支えているのだろうか。

這い回るものは、快樂の絶頂に失神したのか、疲れ果てて眠りこけているのか、あるいは死に至ったのか、動かない者に近づくとその体を包み込むようにして、どこかへ運び去る。壁とも柱ともつかないものの影へ消えると不定形のものだけが戻ってくる。奇妙なことに誰かが消えると、どこからか別の者が現れるのか、人々の数は変らないように見える。

薄桃色のもものが私に気づいたかのようにこちらに近づいてくる。ぶるぶると震えながら、半ば透き通った不定形の体でこちらに這い寄ってくる。目も鼻も口もないその塊の中に、幾つものひどく歪んだ人間の顔が腫に見えたような気がした。恐怖と嫌悪が心中に湧き起こる。

私はファバーン剣を抜いた。古の神秘文字はくつきりと緑色に浮かび上がっている。剣を振り上げ、不定形のものに斬りつける。だが、振り下ろしたその刹那、幻影は泡が弾けたかのように消え去った。目の前には霧に霞む影絵のような家並みとモエヤ婦人の琥珀色の双眸があった。

「大層な業物をお持ちなのね」

婦人は目を細めた。瞳の色が薄くなったようにも輝きが増したようにも見える。

「中古だがね、こんな風にまだ役に立つ」

私は黒衣の女に刃を振り降ろした。袈裟懸けに斬ったはずだったが、手応えはなかった。モエヤ婦人は漂う霧に溶け込むように眼前から姿を消した。

すぐに後ろから白い腕がのびてくる。触腕めいた動きで私の胸をまさぐるうとする。振り払うと女の腕は霧消し、再び目の前に金色の瞳が現れる。奇妙なことに、十かそこいらの子どもになったかのように胸のあたりから色の薄い目が上目遣いに私を見る。「ランケン、ランケン」という幼さを含んだ甘え声が聞こえるが、見上げる顔は表情のない仮面のように見える。

腰に腕を回しびったりと抱きついた娘に右手の剣を突き入れることができな。左手で娘の顔を退けようとすると、軟泥に指を突き入れたかのように、指先が彼女の額と頬にめり込んでいく。

琥珀の瞳の少女は私の胸の前で大人の女になっていく。上背がのび、乳房は膨らみをまし、抱きつく腕にも柔らかい肉がつく。色の薄い瞳に仄暗い影が差し、ふくよかな唇にぬめりとした光が宿る。

顔にめり込んでいた指先はいつの間にか彼女の豊かな乳房をわしづかみにしている。手の中で乳房は張り詰め、赤い唇から艶く吐息が漏れる。邪美神ヨーラの使いは濡れた唇をすぼめて、ふうっと息を吹きかけた。死人も快樂に目覚めるような甘美な香りが私の体を取り巻いた。芳しい濃密な息に肌は溶け出し、禁忌の媚薬がはらわたにまで染み渡るかのよう感じられた。蕩けた脳味噌が耳の穴から流れ出しているような気分だった。

石畳に固いものが落ちる音がどこかでした。剣を落としたのだとかるうじて気づいたが、自分の体が路に倒れる音を聞くことはできなかった。

十

長い夢が続いた。白い肌の女、黒い肌の女、赤い肌の女、黄色い肌の女、

青い目の女、黒い目の女、鳶色の目の女、灰色の目の女、黒髪の女、赤い髪の女、黄色い髪の女、栗色の髪の女、様々な女たちがまわりで蠢き、渦巻き、柔らかな肉の泥流のようになって私を飲み込んだ。まともに息はできず、甘ったるい香りだけが体の奥底まで染み込んでくる。女たちの指が、唇が、乳房が、女陰が私の肉に絡まり、全身を覆い尽くす。それは糜爛の香りとともに私の肌を蕩かしてその中に入り込み、私の肉と溶け合って一つのものとなっていく。

私の中で数多の女体が喜悦の声を上げ、濡れた肉を震わせる。いや、私の体が無数に引き裂かれ、無数の女の肉の中に取り込まれ、押し潰され、どろどろと溶かされているのだろうか。悦楽に身悶えし、肉を引きつらせているのは私の方だ。

無数の女たちが伏せた睫毛の下から私を見る。腫れぼったい瞼の下からのぞく瞳がどれもこれも琥珀色に変わり、金色の光を放ち始める。様々な肌、様々な髪の女たちの顔が皆、一つの姿になっていく。半眼に開いた目が私を見つめているのに、その視線をどうしても捉えることができない。低い響きのある声が私の名を繰り返して呼んでいる。

その声に答えようとすると、喉がつまりて声が出ない。舌は粘土の塊になって口の中に詰め込まれているかのようだ。ひどく苦しい。

苦しさに耐え切れず目を開けると、灰色じみた褐色と紫色の中で、たくさんの極彩色の蝶が飛び回っていた。蝶たちがいつせいに下方へ舞い降りたかと思うと、今度は見覚えのない星座がきらめきだした。星々の瞬きの中で、ひとときわ明るい赤い星がざらざらと光る。

骨を抜き取られたような体を無理矢理起こしたが、蝶たちが一斉にまた舞い飛んで、体が何か柔らかいものに沈み込んだ。

どれほど時がたったのか、もう一度目を開くと、どうにかあたりがはっきり見えてきた。私は柔らかな敷物と布団を重ねた寝台の上に転がっていた。天井には豪華な燭台が下がっていたが、揺らめく明かりはそこからのものではなかった。部屋の片隅に天球儀のような形をした舞い灯籠らしきものがあり、そこから様々な色合いの光が放たれ、壁や天井をぐるぐると回っていた。

動き回る光でよくわからないが、壁はくすんだ紫と灰褐色、長椅子や小振りの円卓、化粧筆筒は鮮やかな塗りに金銀の飾金が光っていた。私の寝

ている寝台は高さが牖の半分ほどしかない異国風のもので、深い紅色と金色の絹の掛け布がかかっていた。

部屋の中にはあの甘い香りが漂っていた。舞い灯籠は香炉にもなっているらしい。

寝台から立ち上がったが、自分が何も着ていないことに気づいた。このままイヌン川にでも飛び込みたい気分だったが、ここからはどれほどの距離だろうか。

足首まで沈みそうな絨毯の上に散らばっていた衣服をふらつきながら拾い集めた。体がひどく重く、怠い。念のため服の中を探ってみたが、もちろん〈ハルロツツの瞳〉はあるはずもなかった。ファバーン剣も見当たらない。

扉の取っ手に手をかけてみると鍵はかかっていた。内側から掛け金をかけ、部屋の中をかき回した。

筆筒や机の引き出しからは、値の張りそうな衣類と装身具、化粧道具、少しばかりの金貨——刻印はなかった——、得体の知れない黒い粉末を包んだ薬包、小瓶に入った何かの薬液と軟膏、獣の骨で作られた奇妙な形の淫具らしきもの、それに一冊の革装の帳面が出てきた。

帳面には整った美しい文字が細かく書きつけられていた。拾い読みすると、それは淫祀邪教とされる様々な信仰や邪淫の神々、精霊、魔物について書き記されたものだった。頁が進むに連れて、次第にヨーラという名前が頻出するようになり、やがて〈失われた九柱の神々〉の復活、あるいは帰還に関する記述も現れる。

帳面には文章だけでなく怪しいものやその祭祀を描いた画像や、魔道書からの抜き書きなのか、詰屈怪異な見慣れぬ文字や図形も記されていた。

最後の方の頁には右頁に縦書きで古代トゥエチ文字が、左側にはウォモレン（共通語）が書き記されていた。トゥエチ文字で書かれていることからすれば『ニベの書』、左側はそれを訳したものなのだろうか。

「しかるに〈ハルロツツの瞳〉なる奇跡の寶石あり。西海の果てパウグの国のその名も忘れ去られし大魔道士の創り出したるこの寶石を用いれば、〈失われた九柱の神々〉を現し世に帰還せしめることも能わん。ヘザイアの星、東方第七宮においてイヴァーナの胸に入る時、アルカズリグの第三の呪文を星辰に届く高樓にて唱えん。さすれば……」

文面はそこで途切れていた。さすればヨーラ、退廃と淫楽の都シェラドゥーアを繁栄させ、その都とともに消え去った邪神ヨーラが復活するとうわけか。

帳面の最後の頁には四つ折りの紙が挟み込まれていた。紙は一度くしゃくしゃに丸められたものを畳み直したように見えた。広げると、それは地図だった。帳面と同じ筆致でどこかの山の麓にあるらしい村邑とそこに至る道が描かれていた。村の外れには光条を放つ丸いものが記されている。

ワコフやジクロイス教徒の話と考え合わせれば、モエヤ婦人が探し求めていた魔石にたどり着く前に、偶然にもジクロイス教徒がそれを発見し持ち去ったということになるのだろうか。彼女からすれば、自分が手にするはずだった《ハルロツツの瞳》は、ジクロイス教徒によって「盗まれた」ということになるのだろう。

部屋の一方向の壁には濃い青紫の窓掛けが掛かっていた。開けると硝子の入った小窓があった。外は暗く、木立に覆われているのか、星は見えなかった。

化粧筆筒の上に置かれていた手燭に灯籠から灯を移し、扉を開けて廊下に出た。暗くひっそりとして人の気配はなかった。廊下の先には大きめの扉があった。中は方形の食卓に椅子が何脚か並んだ食堂らしき部屋だった。

部屋の中にはごく小さな音が規則的に響いていた。手燭で照らすと暖炉の上に機械時計が置かれているのが見えた。精緻な彫り物をした木枠に硝子板がはまり、中で大小の歯車が回っている。針の指し示す時刻は真夜中前だった。彼女の術中にはまって路上で倒れたときは、もう夜半過ぎであったはずだ。私は少なくとも丸一日は眠りこけていたようだ。

部屋には硝子の入った大きな窓があった。透かし模様の窓掛けは開いたままだった。私は窓越しに夜空を仰いだ。東の中空にイヴァーナ座の八つの星が光っていた。そのすぐ傍らに赤い光を放つ一つの星が見えた。占星術師たちが凶運の星とするヘザイア星は今しもイヴァーナの胸に抱かれようとしていた。

モエヤ婦人がこれ以上どれほどの妖しの力を振るうことができるかわかりはしないが、剣を取り戻さなければ太刀打ちできるとは思えなかつ

た。路上では彼女の魔力に抗することはできなかったが、ファバーン剣は時折、古の力の片鱗を見せることがある。剣を持つ私に備えがあれば別の結果を生むこともあるかもしれない。

私は手燭を持って家捜しを始めた。剣が収まりそうなくすすべての戸棚と引き出しを開け、家具の裏や寝台の下をのぞき、絨毯をめくってみた。玄関広間で壁の肖像画の裏——屋敷の元の持ち主なのか着飾った女が品のない笑みを浮かべていた——を調べていると、聞き覚えのある声が出た。「失せ物捜しなら我らの得意とするところですよ」

ソモン・ビットが玄関扉を背に立っていた。扉を開け閉めする音は聞こえず、足音にも私は気づかなかつた。壁抜けの術など使うとは思えない。まだ頭が鈍ったままなのかもしれない。

「お宅に頼んだら見つけ出してくれるのか。まあ、僕がここにいることがわかったのだから、それぐらいは容易いことか」

「あなたがあの石を取り戻し、我らに渡すと約束してくださいさるなら、失せ物捜しの秘術をご覧に入れましょう」

「お宅らご先祖のようなことをしないという証しはあるのか」

「あなたの大事なものを捜し出すことができたなら、それを証しと思つていただく他ありません」

私と老人はしばし黙って見つめ合った。しわに埋もれた青い小さな目は私を見て動かなかつた。モエヤ婦人の捉えられない視線とはまた別の不可思議な力がそこには宿っているようだった。

「わかった。ひとまず、お宅を信用しよう。僕が捜しているのは……」

「皆まで申しますな。あなたが捜しているものは古の魔術によって鍛えられしもの、その力は微弱ながらも脈打ち、見えざる光を発しております。このイユヒの杖の指し示す方をお捜しなさい」

ソモン・ビットの言葉は祭りに並ぶ天幕の占いの口上のようにも聞こえた。だが、老人が差し伸べた杖から手を放しても、それは宙に浮いたまままで、ゆっくりと動き始めた。占術師は聞き取れないほどの小声で呪文らしきものをつぶやいている。中ほどを糸で吊られているかのように、杖は両端を上下させ、回転した。程なくして、杖はある方向を指して動かなくなった。

振じれた杖の頭は斜め下を向き、玄関広間の右奥の扉を指し示している。

扉を開けると短い廊下の先に台所と使用人部屋があった。どちらにもフアバーン剣は見当たらなかったが、廊下の奥の床に引き上げ式の扉があった。地下の物置か貯蔵庫への扉に見えた。

後ろからついてきたソモン・ビットが杖の先で床の扉を二度三度叩いた。

「気をつけなされ。地下にあるのは失せ物だけではないようです」

私は台所から刃渡り一イート（約三十センチ）ほどの肉切り包丁を拝借した。何もないよりはましかもしれない。

扉を引き上げると階段というよりも梯子に近いものが地階へと続いていた。手燭を近づけたが階には埃が乱された跡があった。庖丁を腰帯に挟んで下に降りた。

地下室には酒も食料もなかった。件の甘い香りがわずかに漂っていた。手燭でぐるりと照らしてみると、正面と左右の壁が三つずつに仕切られていた。仕切り壁と柱には細かな彫り物が施され、虫が群がっているかのように見える。

それぞれの仕切りは幅が二イート程で、下部には台座のようなものがあり、何かが置かれていたらしき薄黒い跡があった。正面中央の仕切りにだけは透かし模様の入った帳が幾重にも掛かっており、左右には黄金の燭台と香炉が、その前には紫色の座布団の上にフアバーン剣が置かれていた。

私は剣を腰に吊るし、代わりに庖丁を座布団の上に置いた。

「これでご満足頂こう」

私はフアバーン剣を抜き、透かし織の帳を捲ろうとした。刀身の神秘文字が緑色に浮かんでいる。

「止めておいた方がよろしいですよ」

ソモン・ビットの言葉に私は剣を下ろした。

「そこには恐らくはヨーラの似姿が像として刻まれておりましょう。帳を開き、それを目にしたとき、どのような災いが降りかかるかわかりはしません」

そう言われると、透かし模様の向こう側で、金色の瞳が捉えられない視線をこちらに向けているような気がした。

燭台の蠟燭に火を点すと部屋の有り様がもう少しはつきりとした。

板張りの床には打ち壊されたと思しき彫像の欠けらが、幾つか転がっていた。振じれた蛇か百足のようなもの、角なのか牙なのか先の尖ったもの、吸盤のある掌とも花ともつかないもの、ひどく歪んだ人間と猿の合の子のような顔の断片……。

床の中央には七芒星形に幾つもの円や多角形、それに様々な星座を描いた天球図が重ね合わされたものが大きく描かれていた。あちこちにウォモレン（共通語）ではない幾つかの言葉で呪文か祈祷の文句らしきものが書き込まれている。

だが、それらの図形や文字は幾度も消されて書き直されたような跡があった。苛立ち紛れに踏み消したかのような痕跡も見えた。

「ここは〈失われた九柱の神々〉を祀る場所か」

「かつてはそうであったでしょう。だが、今の祭司はいささか狭量、まるでジクロイス教徒のようですなあ。あれこれと試みが続けたようですが、やはりあの石がなければ無駄骨だったと見える」

老占術師は穏やかな口調の裏に皮肉を滲ませ、杖を順繰りに並んだ祠に向けた。

「ふむふむ、ヨーラの他は大人しくしているようですが……」

杖を右端の祠に向けて、ソモン・ビットは幾らか険しい声になった。

「ここは少しばかり騒がしい。生臭い血のにおいがしますな」

「セベ・チャグルか」

「なかなか諦めの悪い者たちのような」

梯子を登り玄関広間に戻ると大きな物音が響いた。新たな客人はソモン・ビットとは違って静かに入ってくる気はないらしく、玄関の扉に何かを打ちつけている。木っ端が散って、鈍く光る大きな刃が扉から飛び出した。

扉を打ち壊して入ってきたのは、ヘーナンンの戦士だった。身の丈は六イート半（約二メートル）ほどある。鉛色の肌に黒い腰布一枚、二本の腕には巨大な両刃の戦斧、残りの二本の手にはそれぞれ剣を握っている。顔から胸にかけては人相がわからなくなるくらい、白と黒で呪文が隈取りのようなものが書かれている。さほど素顔を見たいと思うご面相でもないようだが。

右の上側の腕と左の下側の腕には、斬り落とされた後に別人の腕を縫いつけた粗雑な黒い縫い跡が見えた。探偵局から敗走した後、もう一度使えようにしたらしい。私が斬った神官の腕でも付けたのだろうか。

セベ・チャグルの者たちが操る死人の戦士は、虚ろな丸い目をぐるぐると動かし、締めりのない口元から涎を滴らせた。殺した相手の肉を食べることで、仮初めの命がのびることになっているらしい。

四本腕の化け物は獣のような唸り声をあげて突進してきた。戦斧をまともに受けるのは遠慮しなかったので、横に飛んでかわすと、奴は勢い余って正面の壁に斧を叩き込んだ。漆喰と木屑が散らばる。それから「ハーナンの戦士」は広間の埃を被った彫像と花のない花瓶を叩き壊し、美しい波目模様がつけられた白い壁を台無しにした。

ソモン・ビットはさっさと廊下の方に引っ込んで、様子をうかがっている。戦いに手を出すつもりはないようだった。

戦斧をかわして飛び込むと、二振りの剣の方が繰り出されるのは経験済みだった。私は奴の斧が柱に食い込んだ隙に背後に回り、縫い目のある方の左腕に斬りつけた。直しがぞんざいだったのか、縫い目のところで腕を斬り落とすことができた。

ただの血ではない黒ずんだものを滴らせながら、奴は戦斧を柱から引き抜き、次の一撃を振り下ろす。市松模様の床がひび割れ、石片が飛ぶ。私は腕が減った左側に跳んで、上の二の腕に斬撃を見舞った。肉が裂けて、赤黒いやな色合いの筋がのぞく。腐臭がするのはそろそろ寿命が近づいているからだろうか。

痛みは感じないようだが怒りはまだ湧き起こるらしい。三本腕となった大男は吠え声をあげると、持ち上げた戦斧を横に薙ぎ払い私の首を刎ねようとした。

唸りをあげる刃を身を反らしてよけると、私は奴の腿に古の魔剣を叩き込んだ。左側によろけた奴の後ろに回り込み、背中を貫く。屍肉に吹き込まれた魔力と剣の力がぶつかったのか、青緑色の電光が傷口から走り、「ハーナンの戦士」はうつ伏せに倒れたが、三本の腕をまだひくひくと蠢かしていた。もう一度心の臓の裏側と思しきあたりに剣を突き刺し、念のために首を斬り落とすと、セベ・チャグルの刺客は動かなくなった。

「お見事なものですな」

廊下から出てきたソモン・ビットがにこにこ笑いながら、何度もうなずいた。

「こういうときに役立つ呪文は知らないのか」

息を切らした私に老人は笑顔を崩さず答えた。

「我らは人を傷つけるような術は使いません。過去の過ちに学んだので」

「ふむ、結構なことだが、こいつは人間なのか」

ソモン・ビットは少しだけ首を傾げて言った。

「ある程度は」

私は巨人が壊した箆筒に掛かっていた掛け布で、黒い液汁で汚れた刃を拭った。

十一

私たちは四本腕が壊した玄関扉から外へ出た。唐草模様の門扉も叩き壊されていた。扉を開けて入るといふ考えは奴にはないらしい。

それなりの物音はしたはずだが、街路には人影はなかった。灯の見える家もあったが、隣家のことには口を出さないのが仕来りなのだろう。

私はジクロイス神殿で聞いた怪しい占いの結果と屋敷で見た帳面に記されていたことを占術師に話した。

「どうやらどこかの高い塔の上で今夜良からぬことが行われるらしい。お宅の見立てではどうかね」

サンジェリイに高い塔は幾らでもあった。エイマン王の宮殿には五つの尖塔があり、ブルクト神殿は七重の塔を持ち、シュヌベル大学には巨大な機械時計を据えつけた時計塔が建っていた。そういった塔では番兵が夜中でも警護にあたっているだろうが、あの女ならそれを打ち破るのは容易いことだろう。

「あの香りをたどれば行く先を探ることは難しくはありませんまい。怪しの力の跡があの香りには残っておるでしょう」

犬でも使うつもりなのかと言いきりそうになったが、止めておいた。

「それにその場所の見当はついております。おそらくは〈魔塔〉と見て間違

いはないでしょう」

「なるほど、それは確かにその手のことには打ってつけの場所かもしれないが、〈廢塔〉は南の大門を出てだいぶ先だ。どこかで馬を拝借するしかないか」

「馬ならおります。まあ、実のところは馬ではないのですが」

私は老人が探偵局から去るときに聞いた奇妙な足音を思い出した。ソモン・ビットは指笛でも吹くように口元に手を当てたが、私の耳には何も聞こえなかった。すぐに闇の中から蹄の音が聞こえた。

屋敷の壊れた玄関から差すわずかな燭光に浮かんだ姿は確かに馬のような姿をしていた。ところどころに白い斑のようなものが見えるのは茸毛あしげということなのだろうか。

普通の馬よりは一回り大きく、口元には牙がのぞき狼のような面構えにも見えた。額には短い角らしきものが突きだし、鞭のような尾は先端にのみ毛が房となっている。何より奇妙なのは豊かなたてがみが風もないのうねるように動いて見えることだった。

老人は鞍も鐙もついていない馬のような生き物に手を掛けると一気に飛び乗った。

「さあ、早く。時はありませんぞ」

差し出された手をつかむと、体が勝手に浮き上がったようになり、私は老占術師の後ろに跨がっていた。

「振り落とされんようにお気をつけなさい」

ソモン・ビットがいかな合図をしたのかはわからなかった。茸毛の「馬」は素晴らしい速さで夜の街を走り出した。私は老人の驚くほどがっしりとした腰にしがみついた。

「馬」は衛士の誰何に留める様子もなく南の大門を走り抜けた。夜空に目をやると、赤い凶星はイヴァーナの北辺の一つの星とほとんど重なって見えた。

門の外にもしばらく続く家並みを抜け、潮のにおいのする海沿いの小道に入ると、タムの木の細い葉の向こうに星明かりを遮って黒々とそびえ立つ塔が見えてきた。

〈廢塔〉と呼ばれ忌むべき場所とされているこの塔の本当の名は誰も知らなかった。塔はルクセン岬の先端にサンジェリイの街ができる前から

建っていたらしい。

ルクセン岬は別名〈ドランの尾〉とも言われ、頂部の幅は陸側で百メートル（約三十メートル）、塔のある先端部ではその半分ほどの細長い岬だった。両側は七十メートルの高さの断崖となり海に落ち込んでいた。

塔は岬の先端にほとんどその幅いっぱいを使って建てられていた。高さは六百メートル（約百八十メートル）にも達すると言われ、艶のない黒灰色の石のように堅いが継ぎ目のない物で造られている。所々に思い出したように小さな窓らしきものがぼっかり口を開けていた。

ソモン・ビットは岬の根本で「馬」を止めた。茸毛の生き物は頭を下げて犬がおいをかぐような仕草を見せた。占術師が尖った耳に何かささやくと、生き物はうなづくように頭を動かした。

「間違いはありません。ここまで妖しき魔の香りが続いています」

老人は杖で黒い塔を指し示した。

「私はこの先へ行くことはできません。あなたのお力のみが頼りです」

「何だって。立ち回りをしろとは言わないが、何か役に立つ呪文の一つ二つはあるだろう」

「この先は禁忌の地です。ヒオゾタンは足を踏み入れることを禁じられているのです」

「なるほど、お宅は高みの見物というわけか」

ソモン・ビットは肩に掛けた布袋から巾着を取り出し、口紐を緩めると中の物を私に手渡した。掌より一回り小さなそれは滑らかな石らしきものでできた円盤状で、中心に不規則な凹凸のあるものが埋め込まれているようだった。色合いは灯がなくわからないが、中心部は星明かりを映しているのか、わずかに光って見える。

「ザナルの鏡」という物です。様々な邪悪な魔術を跳ね返す力があります。おそらくはお役に立つのではと」

「どう使うんだ？」

「危険な邪術が持ち主に向けられれば、自ずとそれを跳ね返すとされています」

「使ったことあるのかい」

「ありません」

「ありがたいね」

私は渡された物を隠しに入れ、岬を〈廢塔〉へ向かった。足下はごつごつとした岩場だが、ところどころ平らになるのは、平石が敷かれた路の跡らしい。

岬の先端までは四百イート（約百二十メートル）程だった。近づくにつれ、塔は視界を塗りつぶすように圧倒的な巨大さを示した。剣を鞘から抜いてみると、フアバーン文字が淡く緑色に浮かび上がっていた。〈廢塔〉自体が、やはり何らかの魔道の産物なのだろうか。

塔の下部には背の高い迫持型の入り口があるようだった。扉は失われたのか、黒い壁にさらに一段と暗い闇が口を開けていた。

そのとき、潮騒に交じって背後で馬車の音らしきものが聞こえた。車声が止まると、一団の足音が岬をこちらに近づいてくる。私は塔をまわって身を隠した。

塔の陰からうかがうと、星明かりの下、白い長衣姿の者たちが早足で向かってくるのがぼんやりと見えた。セベ・チャグルの新たな討手ではない。ジクロイス教徒も今夜の舞台となる高殿はこの〈廢塔〉だと目星を付けたらしい。

奴らは入り口の拱門の前で立ち止まると、輪になって手をつないだ。頭を垂れて祈りの文句を唱和すると、中へと入っていく。最後の者が拱門に消えると、私はしばしの間を置いて後を追った。

先を行くジクロイス教徒が洋燈に灯を点けたので、あたりの様子を幾らかは見取ることができた。

最下層は一つの大きな部屋になっているらしかった。床も壁も石のようなもので造られており、五面の壁にはそれぞれ何かの絵模様らしきものが描かれているようで、渦巻くような灰色の濃淡がついていた。歲月のうちに色褪せ薄れたのか、何が描かれているのかは判然としない。

床は中央に行くにつれ、何段かになって高くなっていき、塔の中心には差し渡し五イート（約一・五メートル）ほどの五角形の柱が立っている。その周囲を手摺のない螺旋階段が取り巻いていた。上方に目をやると、少なくとも洋燈の光の届く範囲には天井はなかった。芯柱からは、所々枝のようなものが突き出して階段の支えとなっており、その先端には裝飾なのか、不定形の臍物の塊のようなものが取り付けられていた。

床の壁際にも臍物を積み上げたような人の背丈ほどの大きさのものが、

ぽつりぽつりと置かれており、私はその薄気味の悪い彫り物——それは触れてみると冷たく、石を彫ったのもらしかった——の陰に隠れ、ジクロイス教徒の動きを見守った。

彼らはトリプロ街の神殿で見た三人の男と二人の女だった。バンネール老人は首の細い小さな硝子瓶を持っている。灰色の口髭の男がその隣に立ち、洋燈の芯の具合を直していた。小太りの男はこちらに背を向けていた。

神殿でよく顔の見えなかったレリーズという女は四十絡み、整った面立ちだが眉間のしわが目立つ。鞭打たれていたフェロシイという若い娘は大きく見開いた目で塔の上部の闇を見上げ、上ずった声を出した。

「ああ、邪悪なものが、この上に汚れたものが……」

口髭の男がなだめるように娘の肩に手をやると、彼女はびくりと身を強ばらせた。鞭の傷が痛むのだろうか。

老人は皆の顔を見回すと無言でうなずいた。口髭の男が先頭に立ち、ジクロイス教徒は階段を昇り始めた。白い法衣の一団は幽霊の行列のようだった。

階段が崩壊しないのを確認してから、私は奴らの後を追って階きざしに足をおかした。ぐらつきはしなかったが、端の方はぼろぼろと崩れている箇所もあった。

頭上、幾らかの距離のところをジクロイス教徒の洋燈が照らしているが、一階と同じく壁には絵が描かれ、柱からは枝と臍物が突き出しているのが見えるばかりだった。壁の絵模様様の濃淡は焼け落ちた跡のようにも見えた。階段はどこまで続いているのだろうか。塔は頂部までがらんどうなのだろうか。

しばらく登ると上の足音が止まった。私も足を止める。見上げると踊り場らしきものがあつた。螺旋階段と同じくらいの幅の五角形で、その各頂点からは一人が通れるくらいの幅の通路がのび、壁沿いに造られた幅の狭い回廊が続いていた。

再び足音が響き、私も歩き出した。踊り場には、例の臍物の彫刻が三つ立っているだけだった。

恐ろしく単調な歩みが続いた。同じような踊り場を二つほど過ぎた。上の方から荒い息づかいが聞こえてくる。老人や女たちにはきつい修業

だろうか。私も体からいやな汗が染み出し、息苦しきを感じた。モエヤ婦人の館で何か葉を盛られたせいもあるのだろうか。ソモン・ビットが塔に來なかつたのは、階段を登るのが厭わしかつたからではないかと、ふと思つた。

上で誰かが転んだらしい短い悲鳴が聞こえた。見上げたが落ちてくる人影はなかつた。ところどころに開いている小窓からは星空が見えたが、へザイアの星は見えなかつた。登るにつれて、星々の光は強さを増し、ぎらつくような瞬きとなつていくように感じられた。自分が螺旋階段を登っているのではなく、塔の方がぐるぐる回転しているような奇妙な感覚に襲われた。足の疲れも感じなくなり、体が宙に浮いて上へ上へと吸い込まれていくようにも思えた。

上部へと進むに従つて、壁との距離が縮まってきたせいなのか、絵模様次第にはつきりと見えるようになった。何が描かれているかは相変わらずわからないが、大小の歪んだ渦巻きと星のように見える幾つもの尖つた先端を持つた多角形、幾重にも重なる細い輪、そういったものが周囲の壁を旋回しながら迫ってくるように見える。灰色の濃淡だつたものの中に赤や青、紫や緑の鮮やかな色合いが見え隠れするようにも感じられた。

上からは足音と荒い息の音、それに時折若い娘が発する声が聞こえた。彼女は神懸かりの体なのか、「腐肉のにおいがする」「淫魔の宴が始まる」といつた言葉を脈絡なく口にし、その度に他の者がなだめたり、口をふさいだりしているようだった。

さらに二つ踊り場を過ぎると、天井が見えた。それは硝子でできているのか、洋燈の橙色の灯を受けて光つて見えた。蜘蛛の巣状の不規則な鉛色の枠の間に透き通る床板がはめ込まれているようだ。

終着らしき場所が見えたせいも、ジクロイス教徒の足音は力強いものになつた。フェロシイという若い女はしゃっくりでもするように、喉の奥から「ひい、ひい」という声を漏らしていた。

私は床でもある硝子の天井の少し下から成り行きを見守ることにした。劍の鯉口を切るとファバーン文字の緑の光がはつきりと見えたので、外套で覆つた。

硝子越しに五人の白い影が見えた。上の階が塔の頂部の部屋らしい。

五面の壁は迫持状となり上にのび、丸天井を形作つていた。大きな窓がそれぞれ壁に切り開かれ、夜空が見えたが、ここからではイヴァーナ座とへザイア星を見つけることはできなかった。

五面の壁の一方に例の臓物と同じ様式で造られた小さな祭壇のようなものが設えてあつた。

祭壇の前には黒紫色の服を着た女が立っていた。

十二

硝子越しに仰ぎ見るモエヤ婦人はあの謎めいた微笑を浮かべていた。歪んだ硝子の中で彼女の笑みもまた歪み、ゆるゆると這う蛇のように蠢いて見えた。

バンネール老人の硬い声と言つた。

「そこな女、この忌まわしき場所を何をしようとしている」

モエヤ婦人は艶めいた低い声で答える。

「星空を見ているのよ。今夜は特別にきれいに見えるでしょう。ほら、あの赤い星があんなに輝いている」

フェロシイがまた「ひい、ひい」と引きつるような声を出した。腕をのばして祭壇と婦人の方を指差している。

「そう、ここにも星がある。きれいでしよう。今夜は天の星と地の星が重なつて一つになる特別な夜よ。あなた方の中にもきつと星がある。あなた方も一つになるのよ」

若い娘の声は甲高い悲鳴のようになつた。誰かがその口を抑え込んだのか、声はぐもぐもり、唸り声のようになる。

「声を出すことも自由にできないなんて、あんまりね。でも、大丈夫よ、すぐにもっといい声を出せるようになる。好きなだけね」

フェロシイは婦人の言葉に應えるかのように「ひい、ひい」と声を漏らす。

「邪教の徒よ、その汚れた言葉で我らを惑わすことなど能わぬ！ 全能にして一なる神と聖なるジクロイスの名に於いて命ずる。へハルロツツの瞳なる邪悪の石を我らに渡すのだ！」

ジクロイアの老人はどこかの王侯並の堂々とした調子でそう言った。婦人はその敵めしさを吹き飛ばすように淫靡な嘲笑を漏らした。

「何とも大仰な物言いを。全能にして一なる神とは、笑止千万、開闢以來、人間が口にしてきた神の名など、幾千幾万あるかしかないものを。姦淫を罪とするジクロイアなど愚昧な不能者、それを崇め奉るあなた方は自ら喜んで鎖に繋がれるいかれた奴隷ね。それが好きならそれはそれで結構だけれど、人間をすべて一つの鎖に繋ごうなどは傲慢にも程がある」

「何という冒涇！ 選ばれし神の子、ジクロイアにそのような言葉を投げつけるとは！ おお、我が神よ、この迷える女性をあなたのお力で救い下さい。洗神の毒婦よ、聖なるお力を授かったこの水を受けてみよう！」

老人は手に持った硝子瓶の栓を抜き、さつと振った。中の液体がヨーラの代理人へと降りかかった。モエヤ婦人は避ける素振りも見せなかった。何も起こらなかった。

滴がぼたりと硝子の床に落ち、弾けるのが見えた。婦人の赤い唇が動いているのは顔にかかったその液体をなめているからだろうか。

「女の股から滴る淫水小水に聖なる力が宿るとは、ジクロイア様も随分とくだけたお方なのね。それとも、これはあなた方が作り出した新しい教えなのかしら」

婦人の毒を含んだ声があった。白衣の者たちの顔はよく見えなかったが、皆、怒りに頬を紅潮させているのか、それとも顔色を失っているのか。「空を見て。赤いヘザイアの星がイヴァーナの胸に抱かれようとしている。時は来たのよ。あなた方が来ることは予期していた。錆びた鎖など私が引きちぎってあげるわ。ヨーラの帰還にあなた方は力を貸すことになるのよ」

若い娘が金切り声で叫んだ。

「ああ、来るわ！ 来る、来る！ 空から来る！」

「物分かりのいい娘もいるじゃないの」

モエヤ婦人は低い笑い声をあげた。

「ええい、鬼女め！」

口髭の男がモエヤ婦人に躍りかかった。だが、婦人は素早く平手で男を張り倒すと、黒光りする沓の踵で倒れた男の股間を踏みつけた。

男は見えない力で押さえつけられたように手足をばたさせている。裏返しになった亀のようだ。

婦人は踵をぐりぐりと動かし、男の股間を蹴った。男は押し殺したようなうめき声をあげた。

「どう？ 気持ちいいでしょう、この偽善者どもめ！」

「魔女め、成敗してくれろ！」

小太りの男が十字型の鍔の短剣を振りかざして突進した。ヨーラの巫女はわずかに身を動かして刃をかわした。小太りの男は口髭の男の体につまずいて転んだ。倒れた拍子に自分の剣がどこかに刺さったらしく、ぎゃあと悲鳴をあげて硝子の床を転げ回った。

「止めろ！ 止めんか！ おお、神よ、我らにお力を！」

バンネール老人の声には悲痛の響きがあった。

「騒がしい！」

モエヤ婦人は右手を口元に当てると、何かをつかみ取るような仕草をして、立ち尽くしている三人へ手の中の見えないものを投げつけた。

「ああっ」

短い幾つかの叫びが重なり、しばしの沈黙の後、別の類いの声が聞こえてきた。

三人は男も女も股間を押さええてうずくまり、息を荒らげていた。老人は若い瘦せた娘に飛びかかり、白い長衣を引き裂いた。赤黒い鞭の傷が硝子の床に押しつけられるのが見えた。フェロシイは引きつった笑い声をあげて身を起し、逆に老人を押し倒すとその腰の上に自らの腰を深く沈めた。レリーズはもどかしそうに法衣を脱ぎ捨てると、老人の顔の上に跨がり股座を押しつけ、若い娘と唇を重ねる。

「そら、おまえもお行き」

蹴飛ばされた口髭の男は婦人の足で蹴られていた一物を露にすると、蚯蚓腫れに覆われたフェロシイの尻にいきり立ったものを突き入れた。

「ほら、おまえもだ。傷の痛みなど消し飛ばさ」

モエヤ婦人は小太りの男の短剣が刺さった腿を蹴った。剣は抜け落ち、男は傷口から血を滴らせながら這っていき、老人の顔に股を押しつけているレリーズに背後から挑みかかる。

五人の男女の喘ぎ声と肉と肉が絡み合う音にモエヤ婦人の低い笑い声

が重なり、〈魔塔〉の中に留まる。醜怪な宴には違いなかったが、私は自分の一物が固くなるのを感じた。気づくとあの甘い香りが仄かに漂っている。婦人の放った妖しの力は階下の私にも及んでいいるのだろう。

その時、嬌声と肉のもつれ合う音に混じって、下から足音が聞こえてきた。かなりの早足で登ってくる。一人ではない。セベ・チャグルの者たちも執念くこまで追ってきたのだろうか。

このまま、ここで新々と顔を突き合わせたくはなかったが、上へ行けば私も宴の仲間入りだろうか。〈ザナルの鏡〉とやらの効能はいかほどのものなのか。隠しの中のそれに触れてみたが、特段何かを感じるということはない。

残る道は、私のいる階のすぐ下から突き出している枝しかなかった。

枝は根元の方は太股ほどもあったが、先に行くにつれて細くなり、臍物の塊のようなものがついている先端では、手首ほどの太さになっている。灰色の石のような物で造られているようだが、果たして私の重みを支えてくれるだろうか。

足音は迫ってくる。洋燈の光も見える。私はナクシャツツの猿のように枝に抱きつき、そろそろと先の方へ動いた。枝はぐらついたりしなかったが、それでもこの下は数百イートの虚空が広がっていると思うと、冷や汗が吹き出した。

先端の臍物まで一イート（約三十センチ）ほどのところで私は手足を枝に絡ませたまま息を殺した。

灯が近づいてきた。先頭の怒り肩の四角い顔の男は口が耳まで裂けているように見えたが、そういう化粧か刺青らしい。彼らの神に似せているのだろう。肩で息をしている猫背の女は小骨や爪牙をつなげた首飾りや腕輪を幾つも身に付けている。この女が死人使いなのだろう。そしてその後ろを足を引きずるようにしてもう二人が登ってきた。

後ろの二人は生きた人間ではなかった。墓場の土塊のにおいが妖しい甘い香りをかき乱した。死人の内一人は私の知り合いだった。昨日の夜、斬って宝石を奪った目の細い男だ。死に立ての男は昨日とたいして変わらぬ面相だった。生きている時から死人のような面だったのだ。もう一人はいささか古参の者らしく、顔立ちが崩れてよくわからない。悪臭は概ねそいつから漂ってくるのだろう。一段階段を上がる度に、ぼろぼろと小

さなものが体から落ちた。蛆だろうか。

一行は私には気づかず、螺旋階段を登り切ると硝子の床の上に立った。私は階段に戻り、様子をうかがった。セベ・チャグルの奴らは生者も死者も蛮刀を手にしていた。一騒ぎ起こる間に好機が生まれるだろうか。

人喰い神の神官たちは先客と違って余分な口上を並べたりはしなかった。モエヤ婦人も彼らの出現に動ずる様子は見せなかった。ジクロイス教徒たちは、新たな闖入者のことなど眼中にないようで、互いの肉体を貪ることに熱中している。

二人の死人は肉切り包丁のような刀を振りかざして、平然と立っている妖女に襲いかかった。モエヤ婦人は薄い上衣の裾をひるがえし、死人の刃を難なくかわした。二人は死人とは思えない動きで蛮刀を振り回すが、ヨーラの巫女は弄ぶかのように斬撃をかわし続ける。

私は階段を一段ずつ登り、硝子の床からそと顔を出した。魔石は祭壇の上、金色のねじれた脚のついた皿に置かれていた。祭壇は階段の上り口とは反対側だったが、モエヤ婦人が死人の攻撃を避けて右手に動いたので、その前には誰もいなかった。

私は緑光を発するファバーン剣を握り、階上に躍り込んだ。

「おおつ、貴様は！」

間の抜けた声をあげる二人の神官の横をすり抜け、快楽に耽って蠢くジクロイス教徒を尻目に祭壇に向かった。

「よく目が覚めたわね」

モエヤ婦人は二人の死人の刃を舞うようにかわしながら、私の姿を認め、そう言った。そこに隙ができたのか、二振りの蛮刀が婦人の体を斬り裂いたかに見えた。

引き裂かれた黒絹の衣裳が宙に舞ったかと思うと、一糸まとわぬ姿となったイム・モエヤ婦人は祭壇の背後の窓辺に立っていた。

星々きらめく夜空を背に、洋燈の光に照らし出された白い裸体は凄艶そのもの、彼女こそ背徳の女神そのもののように見えた。

ヨーラの化身は真紅の濡れた唇をすぼめて、蛮刀でその白い肉を斬り裂こうと迫る二人の死者に強く息を吹きかけた。

最初に目の細い男の方が動きを止めた。彼は刀を取り落とし、苦悩するかのように頭を抱えてうめき声を発した。それから向き直って、細い目で

部屋の中を見回した。乾いた血のこびりついた黒い長衣の股間が突き出していた。

昨日私が殺した男は、もつれあう五人のジクロイス教徒の中に飛び込んだ。黒い衣を一気に脱ぎ捨てると、誰かの肉穴に一物を突き入れて土気色の尻を動かし始めた。

腐りかけの死人の方にも妖しの息の効能は現れた。蛮刀を手放すと、よろめきながらも糸で引かれるかのように絡み合った六つの肉体に崩れた体を投じた。彼の一物がまだ健在なのは定かではなかったが、蛆の湧いた骸は他の体と重なり合い、蠢き、震え、かすれた喘ぎ声を漏らした。

生きている二人の神官は黒い長衣の袖で鼻と口を覆い、吐息の誘惑から身を守ろうとした。袖口の金糸の縫い取りが生き物のように蠢いているのは、そこに何らかの呪文の力が働いているからなのか。

骨や牙の飾り物をつけた女が幾重にも腕輪をつけた腕をのぼし、耳慣れない言葉を発した。怒り肩の男が蛮刀を振りかざして全裸の女に突進する。

モエヤ婦人は嘲るような笑いを浮かべ、セベ・チャグルの男を迎え入れるように両の腕を上げた。蛮刀が首から腰まで斬り裂いたかに見えた。

赤い霧のようなものが湧き起こったが、どうやらそれは血煙とは違う何かのようだった。二つになった婦人の裸体はその深紅の霧に乗るよう宇宙を飛び、男の頭上を越えて死人使いの前に降り立った。裂けた体は融合して一つになり、セベ・チャグルの女魔道士の襟元に手を掛けた。

首飾りが引きちぎられ、骨や爪、牙が散乱した。黒い長衣も引き裂かれ、刺青で彩られた豊かな乳房がむき出しになる。死人使いは蒼白な顔で呪文を唱え続けたが、モエヤ婦人は猫背の女の体を撫でさすりながら、蛇が巻き付くかのように女のまわりをぐるぐる回り、耳元に何かをささやき、胸乳を弄んだ。

二人の女の唇が今しも触れあいそうに近づくと、死人使いの呪文は止み、代わりに情欲に満ちた喘ぎ声が漏れ出した。

婦人は切ない声を上げて抱きつこうとする女の腕からすり抜けた。赤い霧は消えて、蛮刀を持った男が驚愕と怒りに顔を歪ませて女の方に向き直る。

ヨーラの巫女は猫背の女の後ろで手招くような仕草をした。その動き

に合わせて女も同じように腕を動かし、淫靡な笑い声をあげる。男は振り上げた蛮刀を放り投げ、走り寄る。刺青通りに広がったように見える口元から泡が吹き出している。

モエヤ婦人は身をくねらせて惚けた笑いをあげている女を休みなく淫楽に耽っている者たちの中へと突き飛ばした。セベ・チャグルの女はたちまちその肉の塊の中に飲み込まれる。怒り肩の男も獣のような叫びをあげて、その中へ飛び込んでいく。

七人の生者と二人の死者は身を絡ませ、互いの肉を求めあい、悶え、喘ぎ、喜悅の声をあげ続ける。

だが、私には何も起こらなかった。腰のあたりに何かひどく冷たいものがあり、そこから体に染みとおった冷気が脳味噌の中まで達して、この異様な宴の放つ狂熱を冷ましているかのように感じられた。

私は左手で腰の冷たいものを探った。手先の動きが妙に緩慢になり、うまく動かなかつたが、隠しに入れた「ザナルの鏡」が氷のような冷たさを発しているのは間違いない。

いつの間にかモエヤ婦人は私の前に立っていた。「ハルロツツの瞳」は手をのばせば届きそうなところにあつたが、手足は鉛のように重く、その距離は無限に思われた。「ザナルの鏡」の力の代償なのか、あるいは目の前の裸身の妖女の力なのか。

「普通の男なら、もう一日は眠っているはず、あなたはおもしろい人だわ。その胸の中には冷たい心臓が収まっているのかしら」

「あなたも十分おかしなことをする。こんな力があるのなら、自分で石を奪うのは雑作ないことだったろう」

そう唇を動かすのさえ、ひどく意志を集中させることが必要だった。「私が力尽くで窓を破ったり扉を壊したりするとでも？ それにジクロイスの神殿は盲信と狂気の砦のようなもの。あの聖水とやらの力が失せていたのはこの塔と星辰の位置のせいでもある。彼らの言う神が存在するかどうかは知らないけれど、狂信者は間違いない存在する。常軌を逸した狂信は思わぬ魔力を呼び起こすのよ」

「あなたもその一人じゃないのか」

「そうかもしれないし、そうでないかもしれない。何ものにも縛られず、己が思いのままに生きられる世界ならば、神など信じる必要はない。何も

信じるものはないという信仰だけが残る。それもまた一つの狂信かもしれない。そうでしょう、あなたもそうでしょう」

「その手の問答はうんざりだ」

私は手にしたファバーン剣の切っ先を上げ、モエヤ婦人の方に向けようとした。剣は恐ろしく重く感じられ、鉛の塊でも持っているかのようにだった。

「その剣もまたおもしろい代物ね。そんなものがまだ残っていたなんて。あなたとその剣はきつと役に立つ。ヨーラが帰還し、もう一度神々の戦が起これば、その剣の本当の力が解き放たれる。あなたは神をも討つ英雄になる」

「そんなものになる気はない。明日の酒代を稼ぐためにこの剣は振るうのさ」

そう言った自分の声がどこか遠くから聞こえる。モエヤ婦人の声も次第に賑らんでぼやけて聞こえる。同時に耳元では妙に生々しい彼女のささやきも聞こえる。私の名を呼ぶ声はそれ自体が形を持ったもののように私の耳を撫で回し、甘い吐息が鼻をくすぐる。触れてもいないはずなのに、彼女の肌の温みがじかに伝わり、吸い付くような感触が全身を包んでいく。剣を持った右腕がだらりと下がり、剣先が硝子の床を引っかく音が聞こえたような気がする。

突然、耳をつんざくような女の叫び声が響き渡った。耳と目が少しだけはつきりしたが、モエヤ婦人の裸体から視線を移すのは、ひどく骨が折れた。どうにか叫び声の方に目をやると、もつれた幾つもの人体から赤いものがほとぼしっていた。人喰い神の生きた神官がレリージの乳房に噛みついていて、顔中血まみれになった男は、悲鳴とも歓喜の叫びともつかない声をあげ続ける女の白い乳房を食いちぎった。死人使いの女と二人の死人も手当たり次第近くの肉に食らいつついている。たちまちの内に絡み合った人間の塊は血みどろの肉の塊のようになっていった。

私はその場に膝をつき、腹の中のもの硝子の床に吐き出した。

「宴もたけなわといったところね」

モエヤ婦人の声が響いた。
「レフツ！ リーツ！ タルムグア、グツハセケチユナア、ヨオラ・アイトウクア、グラセケチユナ」

血みどろの人間の山と燭光が揺らめく祭壇、無数の星々のきらめく夜空がぐるぐると回っているように感じられた。硝子の床がそれらを映して光り、私は万華鏡の中に閉じ込められたかのような感覚に襲われた。《廃塔》そのものが巨大な鏡の筒となり回転しているのだろうか。

回る世界の中で、イヴァーナ座の中央でひとときわかるく赤く輝くヘザイアの星だけがくつきりと見えた。再び妖女の声が低く響きわたる。

「アイーネ・シュトウザンツグ、ザラ、ノヴ、グワーネ、エヴィルタムジーク、ゾムチムノヴァカレ」

赤い星が大きく賑らみ、夜空が赤く染まった。まわりの星々は赤い広がりの中で、黒い針穴のように見える。イヴァーナ座の八つの星々だけは明るい紫色に輝いている。体がびりびりと震えた。《廃塔》自体が激しく震えているのだ。三度、婦人の声が奇怪な発音の呪文を唱えた。

「オオ！ オウ！ シェラドゥーア、イ・ムグア、コスカス・ナブア、セバイ！ ヨオラ！ ヨーラ！ ヨオラ！ ヨーラ！」

部屋の中が毒々しい赤紫の光で満たされた。金の祭器の上の《ハルロツツの瞳》は心臓のように脈動し、光を明滅させていた。モエヤ婦人の金色の瞳はその赤光を映して血に染まったように見える。私を見ているのか、魔石を見つめているのか、夜空の赤星を見上げているのか、わからない。彼女の透き通った瞳は、万華鏡のような幻影の中で千変万化し、捉えられない視線を四方に撒き散らす。

血まみれの九人の声がひととき高まる。フェロシイが「来る、来る、来るわ」と狂乱の叫びをあげる。ジクロイス教徒もまた人肉に歯を立てているのか、鮮血が至るところから噴き出している。血と淫水のおいが件の甘い香りと入り交じり、塔上の部屋に渦巻く。

私は剣を杖にして立ち上がろうとしたが、足に力が入らず、姿勢を崩した。ファバーン剣の柄頭が腹に食い込むようになり、何か固いものに当たった。隠しの中の《ザナルの鏡》だった。

刀身に緑色の閃光が走った。ファバーン文字がばちばちと音をたて明滅した。剣を握る手から流れ込む何か鏡の発する冷気とぶつかり合い、私の体を内側から揺さぶった。苦痛とも異様な興奮ともつかないものに肉と骨が軋むような気がした。

発条仕掛けのように体が起き上がり、剣を握る手が持ち上がった。倒れ

込むようにモエヤ婦人の方へ突っ込んだ。地獄めいた赤紫の光を発する寶石を台座ごと打ち払い、緑色に光る刃を前に突き出した。

吸い込まれるように剣はモエヤ婦人の胸乳を刺し貫いた。全身に鈍い衝撃が走り、私は剣から手を離すと弾かれたように後退った。

裸の胸からファバーン剣を突き立てた女は、痛みを感じているようには見えなかった。幽かな笑みさえ浮かべ、深い紫色に縁取られた目、その中の金色の半眼は、やはりどこを見つめているのか、わからなかった。

赤い夜空が窓から部屋に侵入してきた。黒い針穴のような星々を宿した赤い空は泥流のようにモエヤ婦人の体を包み込んだ。赤い渦に浮き沈みする白い裸身はそのまま窓の外へと運ばれ、突然恐ろしい速さで夜の彼方へ消え去った。

どこからか、低い艶めいた笑い声が聞こえてきた。ファバーン剣ががらがらと硝子の床に転がった。手をのばそうとしたが、そのまま前のめりに倒れ、何もわからなくなった。

十三

目が覚めると朝だった。白い陽光と幾分肌寒い空気が素通しの窓から入ってきた。波の音がやけにくつきりと聞こえた。

口の中に溜まった苦いものを血と体液で汚れた硝子の床に吐き、痛む頭を押さえて立ち上がった。

モエヤ婦人の姿はどこにも見当たらなかった。黒紫色の絹の切れ端が散らばっているだけだった。

祭壇の前に転がっていたファバーン剣を鞘に収めた。剣には血の痕はついていなかった。

ジクロイス教徒とセベ・チャグルの神官どもは、誰もびくりとも動かなかった。固まりかけた血と淫汁に浸った九人分の肉の塊は、ひどく醜かった。

吐き気が込み上げてきたが、もう吐き出すものはなかった。

《ハルロツツの瞳》は硝子の床の上で色褪せた鈍い光を放っていた。

拾い上げると、冷たくぬめりとした感触があった。内部では弱々しい光

の明滅がまだ続いていた。

朝日の差し込むとは反対側の窓辺に寄った。波頭が陽の光を受けて金色に輝いていた。潮の香りを吸い込むと、少しだけ気分がましになったような気がした。

右腕を振ると宝石はきれいな弧を描いて海原に吸い込まれていった。水音はここまで届かなかった。

隠しから《ザナルの鏡》を取り出した。陽の光の下で見ると、深い青色の石でできた円形のそれは美しかったが、中央の凹凸のある鏡——だったのだろうか——の部分にはび割れ、曇って、何も映らなくなっていた。

螺旋階段にも小窓から朝日が差していたが、壁の絵模様や臍物のような装飾は、光を浴びると一層くすんで見えた。

塔から出て岬を歩くと、正面から朝日が射していた。眩しさに目を細めながら、岬の付け根にたどり着くと、ソモン・ビットが柔らかな笑みを浮かべて立っていた。

「いい朝だな」

「そうですね。どうやら事は首尾よく運んだようですね。あなたにお願いして良かった」

「こいつが役に立ったよ」

私は懐から《ザナルの鏡》を出して、老占術師に手渡した。ソモン・ビットは割れた鏡を一瞥して布袋にしまうと、もう一度手を差し出した。

「石をお預かりしましょう。我々が安全なところに隠し、秘術を尽くして守りましょう」

「石は海に捨てた」

「何ですと！」

老人は顔を強ばらせた。

「ヒオツタンのことは良く知らないがね、ご先祖様はあの石でろくでもないことをしてかしたんだろう。お宅らがいつ何時、あれに魅入られて、また間違いを繰り返さないという保証はない」

ソモン・ビットは杖をこちらに突き出して、探るような仕草で私のまわりをぐるぐると回った。

「ない、ない、確かにあなたは持っていない！ 海に捨てたと！ 何といふことを！」

「あたりは断崖絶壁だ。水底も深い。どこに隠そうとしていたのか知らないが、そういう力にご縁がある者たちに渡すよりも、よほど安全だ」

ヒオゾタンの占術師はしわだらけの唇を噛み、手にした杖をわなわなと震わせた。自らを落ち着かせるように、大きく肩で何度が息をした。

「結社の掟がなければ、あなたに呪いを掛けているところです。良いですか、いつか必ずあの石は人の手に戻ってきます。あの石は、自らが使われることを望んでいるのです。内に秘めた力が解き放たれることを望んでいるのです。魔力の込められた物とはそういうものなのです。あなたのその剣も例外ではありませんぞ」

私はフアバーン剣の柄に触れてみた。昨夜、力を発したせいか、占術使いが間近にいても剣は何の微しるしも伝えてはこなかった。

「いつの日か、あなたの名前はこの世に厄災をもたらした者として、人々の口の端に上ることとなりますよう」

「ふむ、ありがたい占兆だね」

ソモン・ビットは険しい顔で踵を返すと早足で林の中に消えた。馬ではない生き物の蹄の音が遠ざかった。

林にはジクロイス教徒が乗ってきたらしい荷馬車が置かれていた。荷馬車は古びたもので、つながれた栗毛の馬もくたびれて見えた。私は馬を――そう、ただの馬だ――軛から外し、跨がった。栗毛の老馬は鼻を鳴らすと、ゆつたりとした足取りでサンジェリイへの路を進み始めた。